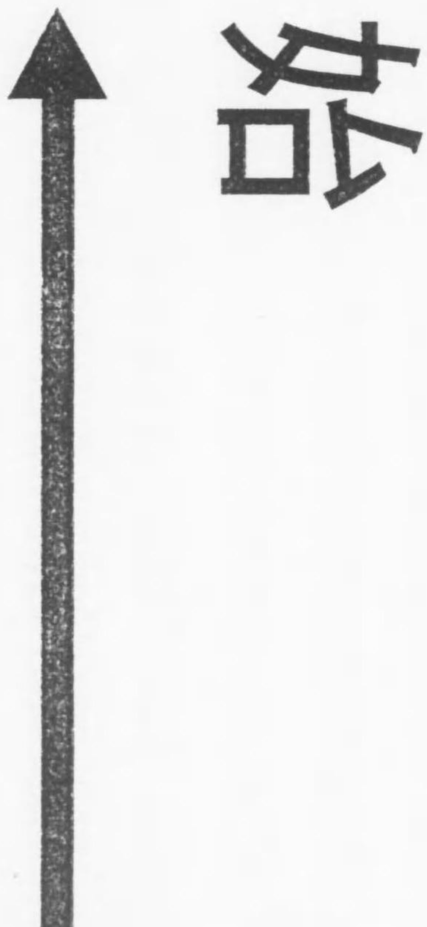
特273-927
1200501128859
特273



97
331

97-331
特273
927

帝國圖書館藏

雜感 冥想 朝思

明治
39 3 26
内交

加藤咄堂君新著

近刊

人格の養成

（起稿中）

「人とは何ぞや」改題

發行所　東京市本郷區本郷一丁目　東亞堂書房

97-331

序

朝思暮想、朝思暮想。善い哉朝思暮想や。人まさに朝思暮想すべき也。

思ふを人といふ。思はざるを土といひ、石といふ。日出でゝ思ふ。思ふによつて人幸に人たるなり。然らずんば人の土石たること久しからん。

想ふを我といふ。想はざるを木といひ、

竹といふ。日入つて想ふ。想ふによつて我幸に我たるなり。然らずんば我の木竹たること久しからん。人の土石たるを免れ。木竹たるを免るるは、たゞ思ふあり、想ふあるが爲なり。大なる哉思想の人に於けるや。』

朝思暮想、朝思暮想。愚なる哉朝思暮想や。人まさに朝に思無く、暮に想無

かるべき也。

思ふを苦といふ。思ふ無きを安といひ樂といふ。眼を思ふ時は眼を病めるなり。財を思ふ時は財に渴せるなり、道を思ふは道猶未だ我に存せざるなり。日出でゝ便ち思ふ。是日出でゝ便ち苦有る也。其の思ふ無きに當つては即ち苦無からん。徒らに思ひ、徒らに苦み、

多く思ひ、多く苦む。思の即ち苦なるを知らざるにあらずして、而も思はざる能はずして思ひ、苦まざる能はずして苦む。人もまた土石に如かずといふべし。

想ふを痴といふ。想ふ無きを明といひ、達といふ。女を想ふ者は、輾轉反側す。女の來つて我を惱ますにあらず、吾の

想の我を惱ますなり。其の痴愍れむべし。梅子を想ふものは、舌頭酸を覺ゆ。梅子の來つて我を欺くあるにあらず、吾の想の我を欺くなり。其の痴笑ふべし。法を想ふものは、理窟勃窣、葛藤荆棘の中に七顚八倒して、枉げて心力を傾注し、乾闥婆城を成し、氣盡き身衰ふるに及んで頽然として萎頓疲弊す。

其の痴また悲み傷むべし。日入つて猶想ふ。是日入つて猶痴なる也。其の想ふ無きに當つては、即ち惱まさるゝ無く。欺かるゝ無く、萎頓疲弊する無く、清風空を度り、明月軒に當るの狀あらん。空しく想ひ、空しく痴に、愈想ひ、愈痴なる、想の即ち痴なるを悟らざるにあらざるも、而も想はざる能はずし

て想ひ、痴ならざる能はずして痴なる、人もまた木竹に如かずといふべし。人の土石に如かず、木竹に如かざるは、たゞ思ふあり想ふあるが爲なり。苛なる哉思想の人に於けるや。』

朝思暮想。朝思益有る也、暮想功ある也。人須らく朝に思ひ、暮に想ふべき也。朝思暮想。朝思益無き也、暮想功

無き也。人應に朝に思ひ無く、暮に想ひ無かるべき也。』

百日之を學ぶ、一日之を進んで思ふに若かざる也。百日之を思ふ、一日退いて學ぶに若かざる也。朝思も可、暮想も可。たゞ必ず一學字を透過するを要す。』

丙午仲春

露伴迂人識

はしがき

一文壇に生活すること十八年、我が文未だ熟せず。我が道未だ通ぜず。朝暮に思想する所。徒らに他の笑を買ふに過ぎざるべし。唯だ一片耿々の志、後進を啓發するに足るものあれば幸なり。

一篇中過半は舊稿に屬すといへども、必らずしも改めず、時に應じて筆を執り、機に臨みて說を立てたるもの、今其感興を殺ぐに忍びざればなり。文體の統一を欠き、事の重複を免れざるも亦多く之れに因す。

讀者請ふ宥恕せよ。

丙午三月　嘯堂　識

多く書を著はせば、直にブック、メェーカーといひ、多く演壇に立てば直に演説屋といふ、吾は實に幾度か他の業を得むと思ひぬ。これ我が自白なり。而して多くの人も亦此心裏の動搖なき能はざるべし。此時に當りて顧みるべきは、自ら行ふ所、道に違するや否やにあり、道を行ふに足るや否やにあり。我、自ら道を行ふべしと信ず、何の憚る所かあるべき。（處世雜感の一節）

朝思——目次

驢鞍橋

修養小訓……一

處世雜感……三三

日常の修養……三〇

鐵菱角

感慨數則……四五

現代青年の病弊……五三

女性問題の根本……六一

無道德主義の道德……六九

宗教の精神病態……七五

一壺天……八三
社會觀……九六
獨嘯錄……一〇三
新武士道……一一五
瞎眼晴……一二三
高利貸……一二四
藝妓論……一三九
演劇と道德……一四八
宿屋哲學
小問題
（終）

冥想雜感

朝思

加藤咄堂著

修養小訓

驢鞍橋

朝に思ひ、暮に想ふ。朝に思ふの時には、希望の微笑あり。暮に想ふの時、誰か追悔の涙なからむ。朝に思ひ暮に想ひ、一日又一日、一年又一年、終に人生の半を空過す、顧みて追悔の涙なき能はざるも、尙ほ前途に希望の微笑あるを禁ずる能はず。

聊か以て自ら慰むるに足らむか。

○

人の世に處する、猶ほ歩を運ぶが如きか。一脚は止り一脚は進む。止る所あつて煩悶なく、進む所あつて慰安あり。彼の不平懊惱、徒らに現代を呪咀するの徒は、双脚を共に進めむとするの痴漢たるを免れず。唯止る事を知て進む事を知らざる知足安分の輩は、又實に自ら進歩向上の途を杜絶するの愚人たるに過ぎず。

○

西詩にいふ、人の一呼一吸は墳墓に赴く進軍の曲なりと。憐れなる哉、人、營々として努め、其終局する所は一土塊のみ。

今までは人のことだと思つたに

おれが死ぬとはこいつたまらぬ。

たまるもたまらざるも、人は終に死魔の犧牲たるを免れず。死せむが爲めに働くか、生きむが爲めに働くか、一人の死の爲めにするものなくして、一人の生を全ふするものなし。人生の意義抑も何の處にある。これ平凡の疑問にして、又千古不解の大疑問たり。予は斷じていふ、人は働くべき爲めに生くるものにして、生きむが爲めに働くにあらずと。頗る人情に戻るが如しといへども、實にこれ宇宙の眞趣より演繹し來れる當然の斷案なるを奈何せむ。

○

春日潛庵云ふ、

人生百年、一事の心に愧づるものなき幾何人かある。愧あり

て知らず、憧憬一世を終るもの、比々皆な然り、豈に哀からずや、上士は然らず、愧あれば改め、愧なければ進む、進むで止まず、身を愧るのみ

と、進取不息は丈夫兒の氣魄にして、自愧反省は君子人の忘る能はざる修養たり。

○

世に處する難きにあらず、道を行ふ難きのみ。人は道を行ふが爲めに世に處すべし、世に處するが爲に道を行ふにはあらず。

○

神は今日野にありて、明日爐に投げ入れらるゝ花をも、其日其日の粧を凝しめたまひぬ。一日の行持は百歳の行持なり、今日一日を注意せよ、これ頓て百歳を注意する所以に非るなきか。

○

心、世の褒貶に迷ひ、耳、人の毀譽に傾くの時、予は常に西郷南洲が

人を相手にせず、天を相手にせよ、天を相手にして己れを盡くし、人をも咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

といへるの語を思ひ、心神の爽然たるを覺ゆ。

○

白樂天の繡佛偈にいふ。

善始一念　念々相屬　繡始一縷
縷々相屬　功德圓滿　相好具足

と、一縷終に錦繡を成す。一念豈に生涯を左右するの素地たらざらむや。

○

顔眞卿の書論にいふ、「獅子撮兎又用全力也」と　細事終に忽諸に付すべからず、大事に對して、人は多くの注意を拂ふ、しかも小事の終に大事たるを知らず。

○

一分の差によりて滊車に乘遲れ一日を空しく過せるものあり、僅にこれ一分時、滊車は客を待たず、機會の過ぐるは滊車よりも迅し、一分時の差、豈に一日を空過するのみに止らむや。

○

溪間の石、其小なるものは水に流され、其大なるものは依然として之れに抗し、激流却て其下を洗ふて、石は終に上流に向て轉ず、輕薄者流は世の風潮に追はれ、大丈夫兒は世をして、却て自己の地位を作らしむ。

○

來て是非を說くこれ是非の人、吾人は是非善惡以外に超越して行動せざるべからず。誤て是非の渦中に墮つ、終に浮ぶの時あるべからざるなり。

○

成功の秘訣は一忍字にあり、家康はいふ、

世の大丈夫と稱せらるゝもの忍の一字を能くす、我未だ大丈夫ならずといへども、忍字を持すること久し、我が子孫、我が人爲を慕ふあらば、五典九經の外、忍の一字を守るべし。

と、これ或は後人の僞作なるべし、しかも家康の性行に鑑みて頗る趣味あるを覺ゆ。

○

一燈を提げて行く、暗夜といへども、憂ふる所なし、黑闇々たる人生の行路、われは唯だ希望の燈を提げて行かむ哉。

○

書を讀む須くこれを心に讀むべし、我の心を以て書の心を解し書の心を以て我が心を讀む、夜雨青燈の下、靜かに讀み、靜かに思ふ、得力眞に尋常にあらざるべし、これをこれ心讀といふ、更に靜中の工夫を動中に活躍せしめて運用自在なるを得ば心讀變じて身讀となる、心に讀む既に可なり、身に讀むに至ては最も妙なり。

○

朝來、新聞紙を手にして、其三面記事を讀む、詐僞あり、竊盜あり、殺人あり、姦淫あり、唯だ雲烟過眼視し去る、しかもこれ社會の反映なり、人心の反映なり、これ何人の心の反映なるかを考量せよ、我が心は以て向上の一路を辿るべきも、飜て思へば、われにも亦此惡事醜行を敢てするの心を有するにあらずや、此心一び轉せば、詐僞、竊盜、殺人、姦淫また行ふなしといふ能はず、危險なる哉、心。一葉の新聞紙も想ふてこゝに至れば、慄然として肌に粟するを禁ずる能はず。

○

一念三千を具す、我が心、佛に通ずべく、又魔に通ずべし、以て聖賢たるべく以て盜賊たるべし。大乘止觀頌に「諸法唯一心、此心即衆生、此心菩薩佛、生死亦是心、涅槃亦是心、一心而作二、二還ゝ無二相」といふもの是れ。

○

東京の俗、毎朝、味噌汁を吸はざるはなし、味噌汁を作る、必らず味噌を摺らざるべからず、味噌を摺る必らず摺木を要す、此摺木、摺鉢との磨擦によりて日に一厘を減ずるとせよ、市内戸數五十萬戸、十戸にして一分、百戸にして一寸、千戸にして一尺、萬戸にして一丈、五十萬戸にして五十丈なり、これを間數に改むれば八十三間二尺となり、一町二十三間二尺となる。我が東京市民は日に一町二十三間二尺の摺木を食しつゝあるなり。點滴、石を穿つ、細事の遂に大事たる概ね此類。

○

一日に一時間を節約せよ、生涯(五十年として)に二萬一千二百五十時間を節すべく、一日に三時間を節せむか、生涯に六萬三千七百五十時間、これを日に直せば二千六百五十六日にして約八年を生き延びたるに同じ。

○

熊澤蕃山、謳ふて曰く、

憂き事の尙ほ此上に積れかし
限ある身の力ためさん

と、人生は一個の戰場なり。丈夫須く此奮鬪的態度あるを要す盤根錯節我れに於て何かあらむ、これ我が試金石なり、佐久間象山の捕はれて獄中にあるや。

我れ此境を履まずんば、此省覺なし、一跌を經れば一知を長ずと、果して虛語にあらず、

と、彼れも亦丈夫兒たるを失はず。

人に勝つ難からず、自ら克つ最も難し、
十千の敵に對し、一夫にして之れに勝つとも、未だ自ら勝ち忍ぶの上なるに若かず(阿含經)
と、これ千古の金言なり、石平道人いふ、
何と勤めても、無我に成れぬものなり、何れも修して見て合點せらるべし、爰に一つ取代物有るを以て我は少し無我に成りたりと覺ゆ、只人を能くしたい〳〵と強く思ふ計にて我を忘れたり
と、人に接する春風の如く、而して自ら肅む秋霜の如くなるを得むか。

○

昔、後漢の郭林宗、樹下に憩ふ、時に其邊を過ぐるものあり、後肩に擔ふ所の陶器の地に落ちて壞れしを顧みずして行く、林宗これを異として問へば、已に地に落ちて壞る、顧みるとも何の要かあらむと、林宗其常人にあらざるを看破し、これを重用したりといふ、人能く千金の璧を碎くも、聲を破釜に失ふなき能はず、能く猛虎を打つも、蜂蠆に變無き能はず、これ人の情なり、或る書にいふ、
伊達政宗、太閤より賜はれる名物の茶碗を弄し、誤て膝下に落せる時、驚きて胸おどれり、さて思ふ、苟も五十四郡の太守一個の茶碗何かあらむ、さるにかゝる物の爲に心胸おどれること、淺ましさよと、遂に其茶碗を石に打つけて碎きたり、
と、英雄自ら英雄の修養あり。

○

克己の功、累積すれば、自ら何の作爲を須ひずして、行動、節に中るを得べし。己に克つ、其當初に於て困難なるものありといへども、一たび克つの習慣を作らむか、こは累積して第二の天性となり以て人格を玉成するに至らむ、修養の困難なるは其第一歩にあるのみ。

○

中村敬宇先生は近世の君子人なり、曾てエマーソン賠償論を譯し、これに序して曰く、

人の善を爲すは何の爲ぞや、世人に知られ姓名を賣るが爲なるか、曰く否なり、君主に知られ恩賞を得るが爲めなるか、曰く否なり、然らば何の爲ぞや、曰く人たるの道を盡さん爲なり、何となれば、人は常に善を爲すべき者なり、善を爲すは人の人たる當然の道なり

と、吾人の鞠躬努力するもの唯だ此道を行はむが爲めのみ、もとより何等の報酬を希ふべきにあらず、魯仲連いふ、

天下の士に貴ぶ所のものは、人の爲めに患を排し、難を釋て、而して取るなきなり、即ち取るあれば是れ商賈の事のみ。

と、達磨は曾て梁武が有所得の善根を喝破して無功德と爲しぬ。

天は吾人を覆ふて其報を求めず、地は吾人を載せて其功に誇らず、人の人として人たるの道を行ふ、これ當然のみ、道の爲めに道を行ふべし、報酬を較量すべきにあらず。

○

河合繼之助いふ「世になくてならぬ人となるか、あつてはならぬ

人となるべし」と、丈夫、世に志す須く這般の覺悟なかるべからす、其人存すれば其國重く、其人亡れば其國輕し、此くの如くにして初めて重を天下に成すべし。

○

西郷南洲いふ、

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は、始末に困まるものなり、此始末に困まる人ならでは、艱難を共にして、國家の大業は成し得られぬなり。

と、南洲實に此始末に困るの人なりしなり。今の世小才子、小經世家多くして、一人の始末に困る底の人物あるなく、世を舉げて滔々「あつてもなくてもよい」代物たるに過ぎず、悲哉。

○

道を云ふものは利を厭ひ、利を云ふものは道を厭ふ、此に於て道義、世と遠ざかり、世又道義を卻く、道と利、豈に斯く背反するものならむや。眞の道は眞の利に合し、眞の利は眞の道より出づ。

○

人生と相渉らざるの道義は眞の道にあらず。道義と相渉らざるの利益は眞の利にあらず、不義の利益は浮雲の如く、厭世の道義は世に用なし。

○

伯夷叔齊は古の賢人なり、ダイオゼニスは寡欲を以て稱せらる。彼等は自ら潔うするを知て、未だ他を濟ふの更らに大なるものあるを知らず、今の世、千の伯夷叔齊あり、萬のダイオゼニス

あるも、以て世を濟ひ民を益するに足らず。

白隱の隻手の聲を聞かむより兩手を打つて商ひをせよ

吾人は、こゝに活道德の活趣味の存するを想ふ。

○

「出世の道は即ち世を渉るの中にあり、必らずしも人と絶ち以て世を遁るゝにあらず、了心の功は即ち心を盡くすの内にあり、必らずしも欲を絶ち以て心を灰にするにはあらず」と洪自誠の云ひけるもの以て活道德の活趣味を道破せりと爲すべきか。

○

高原陸地、蓮華を生ぜず、卑濕淤泥、却て此花を開く、塵俗の中にあつて、しかも惑はざれば、こゝに初めて眞道德の光輝を見む。

○

眞道德の源泉を究めむとす、先づ驀直に進前するを要す、進前其源頭に至り退歩却來して、こゝに自由の濶天地あり。名利の中にありて却て名利に墮せず、活人を殺盡して初めて活人を得、朱文公、此妙趣を詠していふ、

歩隨流水覓溪源　行到源頭却惘然
始知眞源行不到　倚筇隨處弄潺湲

と、倚筇隨處弄潺湲の境に至て、又他に瞞せられず。

○

道は鹽なり、業は食なり、食に鹽なくむば、其味美ならず、業に道なくむば、其業終に妙ならず。

○

宇宙は活動し、萬物は進化す、活動は天地の常態にして、進化は自然の法則なり、人、其中に生れ、其中に育す、バウルゼンいふ、「宇宙は活動なり、而して其組織は汝の腦中のものと同一なり」と、仰て天を望み、俯して地を見る、四時行はれ、萬物育す、吾れ其れ何の時か安を偷むの隙あらむ。

○

カーライルいふ、若し大石道に横はるあらば、儒者は見て以て行路の障碍と爲し、勇者は見て以て進歩の楷梯となさむと、進取不息こゝに汝の成功あり、不屈不撓こゝに汝の滿足あらむ。

○

新年頭に立ちて誰か梅花と共に自ら新たならむを欲せざらむ、年窮歳盡に對して誰か霜鬢明朝又一年の慨なからむ。悠々たる天地、もとより時間の劃すべきなし、人は徒に年に新舊を分ち、月に去來を定め、自ら煩悶し苦惱す。愚なるが如しといへども、これ一種の興奮劑なり。人生は此區劃によりて其惰氣を警醒す。

○

「一句、乾坤を定め、一劍、天下を平ぐ」、丈夫須く此慨なかるべからず。冗舌多辯、紛々裏に沒頭し、小機小畧、事擾々、嗚呼、「茫々たる宇宙人無數、幾箇の男兒か是れ丈夫」

處世雜感

人は何のために生きざるべからざるか。他はいふ、これ人類自然の要求に出でたる生存の慾望のみと。然り何人か生存の慾望なからむ、然れども、これのみを以て人類生存の意義とするには、あまりに單純なり。人は宇宙の一員なり、宇宙は進歩し發展す、人豈にこれと沒交渉なるを得むや。彼の社會を組織し、國家を建設し、共同生活の圓滿を計るもの、これ天地の化育を助け、其進歩發達を計るべき使命を完成せむと欲するが故にあらずや。人類生存の意義こゝにあり。

○

社會は宇宙の目的を完成せむが爲に組織せられたる共同團體なり。人其の一員として其進歩發展に貢献す、こゝに於てか報酬あり、以て個人生活を經營す。社會を一の會社とせば人は其株主たり。株主たるが故に配當を受くるの權利を有す。勞力あれば報酬あり。勞力を吝むで報酬を望むの徒は株金を出さずして配當の利を得むとする沒分曉漢たり。

○

現代の社會に缺陷多し。勞力と報酬との平均を失す、これもとより改善せざるべからず、これを改めて圓滿の境に進め、宇宙の理想を實現する亦人類の任務なり。

○

人類は二個の任務を有す、社會の共同生活に貢献すると、其進歩發展を計るとこれなり。これ人の道なり、自然の使命なり、

人は此使命を全ふせむが爲に生くべし、生きたきが故に生くるにあらず、此道を行はむか爲めに勞動すべし、生存の慾望の爲に勞動すべきにあらず。

○

人は道を行はむが爲に業を求め、道を行はむが爲に生く、道にして行ひ得べくむば、車夫馬丁といへども、則ち可なり。道にして行ひ得べからずむば、高位大官吾に於て何かあらむ。夫丈須く此慨あるを要す。

○

憐れなる哉。今の青年、生活の爲に業を求むることを知て、道の爲に求むべきを知らず。滔々利に走りて、唯目前の事を企畫して其根本を逸することと。

○

吾、何の爲に生く、曰く道を行はむが爲なり、道にして行ひ能はずむば、我が生活は實に意味なきものと成り了る。徒らに意味なき生存を貪らむより寧ろ死するに如かず。

○

死、これ厭ふべきか、死して以て道を行ひ得べくむば死何ぞ悲むに足らむ。これを人間の常情にあらずといふ者は卑怯未練の儕輩のみ。

○

生を欲するは人の常情なるべし、然れども人生には死ぬに死なれぬ苦みあるを知らざるべからず、何が故に死ぬに死なれざるか、これ道に違せざらむを欲するが爲めのみ。

死は易く生は難し。生を保たんが爲めに營々として働く、生を保つは易し、道に違せざるは難し、道に違せざるは易し、道を行ふは難し、道を行ふは易し、毀譽に動かされざるは難し。

○

吾、道を行ふ他の毀譽何かあらむ。然れども、吾は常に毀譽に動かされ、褒貶に左右せらる、其事業に於て、其生活に於て。

○

吾、何か故に衣食住の佳なるを望む。其多くは他に誇らむが爲めなり、他の毀と貶とを避けむが爲めなり、きたなしといへども、これ人の情なり。

○

吾、我が事を行ふ、人これを毀れば則ち不快の念なき能はず。人これを譽むれば得意の情なき能はず。人我れを毀るも一毛を損せず、人、我れを譽むるも一糸を加へずといへども、此くの如くに考量する能はざるは、人生の常態にあらずや。

○

多く書を著はせば、直にブック、メエーカーといひ、多く演壇に立てば、直に演説屋といふ、吾は實に幾度か他の業を得むと思ひぬ、これ我が自白なり。而して多くの人も亦此心裏の動搖なき能はざるべし。此時に當りて顧みるべきは、自ら行ふ所道に違するや否やにあり、道を行ふに足るや否やにあり。我、自ら道を行ふべしと信ず。何の憚る所かあるべき。

○

今の社會は人の成功を祝福するほど宏量にあらず、今の人は成功に乘ぜざるほど細心にあらず、社會に此宏量なく、人に此細心なし、漫に社會の宏量ならざるを咎むる勿れ、予は寧ろ人の細心ならざるを戒めむ。

○

道心に衣食あり、衣食に道心なし、予は此言の理あるを想ふ。我こゝに社會の共同生活を助け、其發展進歩を計る。社會は必らずこれに報酬を與へずむば止まじ、唯だ報酬を欲して道心を欠く、これ自ら貧を招くの因たらざるなきが。

○

濁富の希ふべからざるが如く濁貧も亦喜ふべきにあらず、富にして求むべくむば清富にあり、貧にして安んずべくんば清貧にあり、滔々世間清貧を口にするの徒、多くは負惜のみ、濁貧のみ。

○

清貧は恥る所にあらず。しかも濁貧最も恥づべし、其道を行ふこと誠に、其生を保つこと簡ならむか、よし富まざるも、亦濁貧を免るゝを得むか。

○

相識天下に滿つるも知心其れ幾人かある。十年、江湖に放浪して濁貧洗ふに由なく、今にして處世のいよ〳〵困難なるを想ふ。而して實に處世の困難なるにあらずして、道を行ふの難きにあり、道を行ふの難きにあらずして、世の毀譽に動かされざるの困難なるのみ。

日常の修養

修養の道程は第一歩にあり。しかも此一歩を誤ること多く、心、理に存して行、常に非なり。曾て山鹿素行の配所殘筆を讀み。たとへば紙を直ぐにたつに如何樣細工能く候ても、定規無之、手にまかせ候てたち候へば、不殘ろくにたて候ても、人々左樣にたたせ候は不成候、所に定規をあて、裁ち候へば、大方幼若の者まで、先其筋目の如くには裁之候、其間に上手下手有之候へ共、其筋目は一通りに參候

といふに至り、修養の道程には、一定の規矩なかるべからざるを思ひ、普く古人修養の跡を探ぐるに、雲接大師に効過格あり、フランクリンに自警の目あり、朝暮、戰々として其格に違はざらむことを努め、これを努めこれを奬みて、こゝに第二の天性を醸成し、終に規矩なくして筋目正しく人道を行ふに至る。若し夫れ大力量底の人に至ては、もとより此の如きの小規矩を要せず、出でゝ天地の動靜を觀じ、入つて自己の心裏を省察し、以て修養の資たらしむべしといへども、外、達觀の明なく、內、散亂の心を藏する吾人は、彼の某市人が、

今日一日の事

一。今日一日三つの御恩忘れず不足云ふまじき事

一。今日一日、決して腹を立てまじき事

一。今日一日、虛言を云はず、無理なることをしまじき事

一。今日一日、人の惡しきを云はず、我がよき事をいふまじき事

一。今日一日、存命をよろこび家事を大切につとむべき事

右は只今日一日の愼にて候

といへるの趣味あるを想ふ。「右は只今日一日の愼にて候」、一日二日又三日、以て習慣性を造るべし。姑息なるが如しといへども、これ亦修養の規矩たるに足らざらむや。頃者大内青巒先生「週訓」を著はし日、月、火、水、木、金、土の七曜に高遠の理を寓して修養の資を示さる。蓋し是れ應機接物の手段に出でたるものにして、言簡なりといへども、其意深し、左に掲げて未知の人に示し、以て朝思暮想の料となさむ。

○

◎今日は日曜なり、彼の太陽の長なへに光と熱とを萬物に施與して、皆能く其生存發育を遂げしむるを思ふべし、我等は是れ萬物の靈長と稱せり、豈亦其有する所の資財又は智識等を分ちて、之を他の足らざる者に施與し、以て互ひに相助け相濟ふの道を履まざる可けんや。佛敎に之を布施といふ、祖師曰く布施とは他の報謝を貪ぼらず、自らが力を分つなりと。

◎今日は月曜なり、彼の月輪の常に正き軌道を踐みて、望夜には必ず圓滿し、晦夜には必ず其影を收む、其規律整然として、聊かも秩序を亂すこと無きを思ふべし、我等も亦豈一身の起居動作より、家庭の秩序社會國家の習慣法律に至るまで、皆必ず秩序整然として亂れざらんことを希がはざる可けんや、佛敎に之を持戒といふ、經に曰く孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲すと、一切の秩序は孝を以て本と爲すことを忘るべからず。

◎今日は火曜なり、彼の火の能く物を燒く、惡臭紛々たる汚穢

の草木等をも厭ふこと無く、只其本分を盡して如何なる物をも燒き盡さゞれば已むこと無きを思ふ可し、我等も亦豈如何なる逆境にも忍耐して、人の人たる本分を全たうすることを希がはざる可けんや、佛敎に之を忍辱といふ、經に曰く忍の德たること持戒苦行も及ぶこと能はざる所なり、能く忍を行ふ者を名けて有力の大人と爲すと、吾人必ず其大人たることを期すべきなり。

◎今日は水曜なり、彼の諸の水の皆悉く大海に向て流るゝや、沼々として滯ふること無く、如何なる山岳をも迂廻して只其目的を達せんとするを思ふべし、我等も亦如何なる障害をも排除し幾許の困難にも克ち得て、以て人生最終の目的を達せざる可らず、佛敎に之を精進といふ、經に曰く譬へば少水の常に流れて能く石を穿つが如しと、吾人豈黽勉せざる可けんや。

◎今日は木曜なり、彼の老樹大木の能く其根幹を固めて、如何なる大風に遇ひても、枝葉の靡くに任せて、決して其本を動すことなきを思ふべし、我等も亦豈深く其心の本源を靜かにして如何なる境遇にも妄りに情念を動すこと無く、萬事に應じて綽々餘裕あらんことを希はざる可けんや、佛敎に之を禪定といふ、經に曰く心を一處に制すれば事として辨せずといふこと無しと。

◎今日は金曜なり、彼の黃金の百寶に王たる、純眞にして雜物を交へず、長なへに其質朽ちず、其色變らず、之を以て諸の善根功德をも積むべく、諸の美觀も亦之に過たるもの無きを思ふべし、我等も亦諸の雜念妄想を離れて其變壞せざること金剛の如く、諸の善行美德を發揮すべき眞心の光明を放たざるべけん

や、佛教に之を智慧といふ、經に曰く當に聞と思と修との慧を以て而も自ら增益すべしと。

◎今日は土曜なり、彼の大地の能く萬物の母たる、諸の植物鑛物一切の動物等、皆悉く之を載持懷抱して、各其處を得て生育發達せしむるを思ふべし、我等も亦豈萬物をして各其處を得せしめ、別して人類に對しては機に應じ緣に隨ひて、其身心に安慰を得せしむることを希がはざる可けんや、佛教に之を方便といふ、經に曰く醫の善く方便して狂子を治するが如く、毎に自ら是の念を作せ、何を以てか衆生をして無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめんと、吾人の心行こゝに至りて始めて以て人生最終の目的を達することを得たりと謂ふべきなり。

右七章、毎日一章を讀み且つ之を記憶し、篤く其理を信じて、分に隨ひ力に應じ、其實行を勉め、終りて復た始むること終身怠たること勿るべし。

明治三十七年十月筆記して兒等に示す　藕々居士大内青巒

これ大乘佛教道德の綱領たる布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智惠、の六度に方便を加へて、日常修養の資に供せられたるものにして其要を示せば、

一　博愛仁慈　（布施）
二　規律嚴守、　（持戒）
三　堅忍不拔　（忍辱）
四　刻苦勉勵　（精進）
五　靜思熟慮　（禪定）
六　智能啓發　（智慧）

七　才思縱横　（方便）

の七則にして、正にこれ處世の金針、修養の規矩たり、此規矩小なりと雖、庶幾くば筋目正しく人道を渉るを得むか。

○

七則の中、第七の方便は其應用自在をいふものにして、要は六則にあり、六則更に約して、三と爲すことを得、三とは何ぞ、所謂智、仁、勇なり、予曾て說ひていふ。

先づ人間が何事をするにも必要なのは、昔から智仁勇といふて居ります、さて一概に智仁勇といふが、此仁と申します中にも二つある、仁を積極的と消極的に分けますと布施と持戒とに分ける、是も俗に解釋いたしますれば直ぐに分りますが、布は敷くなり普くなり施は施し合ひ惠み合ふことなり、社會は共同生活であるから施し合ひ惠み合ふといふことが布施の姿である、佛教專門の言葉では布施と言ひ天竺の言葉では之を檀那といふ、其檀那といふのが即ち施し合ひ惠み合ふといふことで其天竺の言葉が日本へ參つて旦那といふ言葉が出來た、本當であります、隨分施さぬ旦那もありますが旦那といふのは施すといふことであります、此施すといふことが人間の務だといふことは申さないでも宜い、人の爲になるやうな事をしてやらうといふ考が必要であると共に人の爲にならぬ事はすまいといふ心を起さればならぬ、そこで持戒といふ、持戒とは人の爲にならぬ事をせない事で戒は防非止惡の義即ち惡い事はしない、一面に人の爲になる事といふ言葉があると其逆まに人の爲にならぬ事はせぬといふ事が無ければならぬ、人の爲にならぬことをせぬとして見るとそこで仁といふことは積極的には仁惠を施すこと、消極的には不仁なることを爲さぬ持戒にならなくちやならぬ、此持戒は法律を守る常に國憲を重んじ國法に遵つて行くことが持戒であります、學校に居れば校則を守り會社に居れば會社の約束を守る、人と人とであれば約束を守る、親は親、子は子と、各守るのが皆持戒であります、之を教育の勅語に當てるならば、博愛衆に及ぼしは布施であるし、公益を廣め世務を開くことも布施であります、それから國憲を重じ國法に

遵ひといふことは持戒であります。

それから今度は勇、此勇も分れて二つとなる、即ち忍辱と、精進とである、

忍は忍ぶ辱は屈辱でありますニンニク忍辱といふと佛教の讀方で可笑しいやうだが佛教讀で無くして讀めば忍辱（ニンジヨク）であります、此辱を忍んで行くのが勇氣であります、辱を忍んで行く是が無ければならぬ若し之を俗語に當嵌めるならば己を制する事が忍辱だ、自分の心にも又自分の外にあるものにも勝つて行くのであります、次に進歩することも是も勇氣であります、出る勇氣を出して向上して何處までも進んで行く一旦緩急あらば義勇公に奉じ以て天壤無窮云々と一旦緩急あらばといふ時には精進で進む、忍耐丈けを知つて進むことを知らなくては仕方が無い辱を忍んで居るのは進歩をなすが爲である尺蠖の屈すゝは伸びんが爲なり、我は向ふに進歩する目的があるから勉強する、飲みたい酒も飲ます吸ひたい煙草も吸はずして一生懸命に忍辱する、試驗に及第せんが爲である忍辱精進して進んで行く、是は積極と消極の二つであります。

それから智、此智惠も消極的のものは禪定、積極的のものは智惠であります、此禪定といふことは御承知の通り禪は禪那、定は心を修める方で支那の字にして靜慮といふ、考を靜めるのであります、心を一所に定むれば事として成らざる事なし精神一到何事か成らざらん、丁度百姓が田を耕す爲に水を一つの塘に停めて置きまするやうに心を一所に止める、さうすれば智惠が本當に進んで來る、智の上の積極的が智慧、消極的が禪定、詰らぬ智惠を出さぬ樣に抑へ付ける是丈けの説明ではまだ不充分であるかも知れませぬ下の方から逆まに言うて行くと直ぐに分る、此の智慧の反對を名づけて愚痴といふ、同じ智は智だけれ共馬鹿だ、ずだれの智だ、病的の智、之を名けて散亂といふ、智は智だが愚痴である、我々餘り長く饒舌つて居られては困るといふのが愚痴であります、愚痴といふのは宇宙の眞理を眞理と見ない奴を言ふ、散亂とは禪定の靜かに慮かるの逆まになつて心がチリチリバラ〳〵になる、朝御互が考へたことゝ晩に考へた事とは變つて行く、酒を飲んで二日醉でもして頭が重かつた時にはモウ酒は止めるぬと言ふ正午頃から頭が少々輕くなつて氣持が直るとソロ〳〵晩方には一パイやらうといふやうになる、又例へば事を致しますのに今日は是丈け復習して置けば

宜いナニ朝は面倒だから晩にやらう晩になると翌朝までにやつて置けば宜いといふやうに變る、さふ云ふ風では我々の心は西に東に南に北に心の猿の狂ひ易くし〻散亂して居る人が一室の内に座して遠く何處かの事を考へて居る人に實に散亂の極であります、此紙片の如き心に糊を附けてピタリと石に貼り付ける奴が禪定であります、此又散亂と愚痴は病的智識であります、又精進の逆まは懈怠である、精進する勉強するは嫌やだ、そこで怠るのであります、それから忍辱の逆まは何だ辛抱する逆まは腹を立てる、人間我々は腹を立てなければ宜いのだが辛抱が出來ない、少し散亂した心を靜めて見れば辛抱が出來るのでありますジョンフエルソンといふ人でありましたが、腹が立つたならば十まで勘定してから怒れと言ひました、ムカ〳〵と怒つて一二三四五六七八九十と勘定して居るとモウ怒らなくても宜い、所で忍耐の逆まは瞋恚であります、それから持戒の逆まは破戒であります、惡い方をしないのが持戒であるから其反對は邪惡であります、それから布施の逆まは慳貪であります、即ち施すの反對で吝しい貪る施すどころか自分が欲しい、慳は吝むことです、斯う云ふ工合に逆まに言へば分るのであります、そこで右の慳貪、瞋恚、愚痴の三毒を略して貪、瞋、痴の三毒と申します、そこで又此三つぢや都合が悪い一つに收めて仕舞ふと貪瞋痴の三毒のよるところは我、己が己がの我だ、己といふ心を出すから貪る心が起る己も御前も同じことだから己の物は御前の物だと言へば貪ることは無い、己の物は己の物だから御前の物も己の物だといふから貪る、一切平等無差別で我も人も同じ人間であると思うたならば、

雪の日やあれも人の子櫛拾ひ

などゝいふ憐みの心が起る、己だの御前だのといふ心があるから腹も立つが己も御前も同じだといふ心が出れば頭を打たうといふ心は起らぬ、宇宙には樣々な現象があるけれ共道といふものは斯樣なものであるといふ事が分つたならば宇宙全體の道理が分つたならば愚痴は起るべきもので無い、それに次いで三毒の迷が起る元とは己が我がといふ考があるからである、若し其考が無くなつたならば宇宙の眞理は明かに見へて居ります、己が明鏡に曇りがあるから宇宙の眞理が分らぬ、我といふ考を去つて仕舞へば宇宙の眞理は明かに分ると思ひます、我を捨てゝ君の爲國の爲にならうとい

ふ事になる、君の爲、國の爲には我身を忘れて行くから微妙な働きが出來る、慈悲もさうだ人に物を施して禮を云つて呉れといふやうなことはいかぬ、我も人も同じ事なり人も我も同じ事であると考へると眞の施しが出來る、故に日常の事と雖も其土臺は無我である、さうすると佛教の道德の根柢は無我にあつて迷の根柢は我にある、故に我身は差別の上に生じ有限にして不完全なもの不自由なものであります、無我は絶對で自由で平等で無限であります、此我身の無いといふことが宇宙を見出して仕舞つて無蓋の光を出すからで是が佛教道德の根本であります。さう云ふ工合に我々は宇宙の一員であり宇宙無限の空間無限の時間であり我々は五十年の生命を有する老若男女ですけれ共我は既に宇宙の一員であり宇宙の目的、宇宙の精神を持つて居る我々の中に宇宙の精神と同じ心がある、之を名けて佛性と言ふ、之を名けて如來と言ふ、之を名けて眞心と言ふ、之を名けて眞知眞能とも言ふことが出來る、

（慈惠醫院醫學校に於ける演說筆記の一節）

以て週訓を解するの補たるを得むか。

鐵菱角

時感數則

社會は學窓より觀察したるが如き單純なるものにあらず。經世の事、豈に理論一偏を以て斷じ得べきものならむや。今の世、學者に欠く所のものは經世の才にして、經世家に欠く所のものは深遠の學殖なり。口の人は多くして手の人は少く、手の人は多くして腦の人は少し。

○

學者に經世の才なきが故に、謂ふ所は空理空論にして世態人情に應せず。經世家に學殖なきが故に、行ふ所は淺薄皮相にして

精通達眼の計なく、世を擧げて虚妄の分別に迷ひ、人は皆な其歸趣を失ふ。悲むべき哉。今の世。誰か正知見を提げ來りて此迷路を斷つものぞ。我が徒の責、重にして且つ大なり。

○

理性と感情とは人心の二大部面にして、其調和は實に精神全體の安慰を得る所以なり。しかも理性をいふものは其一片に偏して冷やかなること氷の如く、感情をいふものも亦徒らに直覺の影を追りて熱すること火の如し。哀れ、今の思想界は此二大潮流によりて導かれ。煩悶、懊惱、流離、困頓、終に一條の覺途を見出す能はず。

○

右せむか理性の伴はざるあり。左せむか感情の從はざるあり。

感情は理性を超越す。しかも理性の承認を受くるなきの感情ほど危險なるはなし、理性は感情を支配す。しかも感情の隨伴せざる理性ほど冷酷なるはなし。所詮、此二者の圓融を待つにあらずむば、心海の濁浪は終に平靜の期なかるべきなり。何人か此濁浪を叱咤して心海、事なきを得せしむべき。我が徒の責、重にして且つ大なり。

○

社會主義は現代の欠陷を救ふて、地上に天國を築かむとするものなり。帝國主義は宇内の大勢に顧みて國家自存の目的を貫遂し、神の王國を地上に現出せしめむとするものなり。其相背反する所のものは手段のみ、方法のみ、究竟の理想に於ては、我れ其相距ること遠きを見る能はず。

○

帝國主義者の弊は現代に重きを置きて其究竟理想を閑却するにあり、社會主義者の弊は理想の實現に急にして現代の事情を閑却するにあり。吾人は目を社會主義に注がざるべからざると共に、又耳を帝國主義に傾くるを忘るべからず。眞理は遍通す。吾人の執るべきもの豈に其一面にのみ存せむや。

○

脚頭、常に地を離れず、吾人は地の人なり、現代の人なり、時間と空間とに縛られたる有限の人なり、然れども、吾人の眼光は高く天空を望むべく、吾人の考量は遠く過現未に及ぶべし。吾人は天の人たるべく、理想の人たるべく、時空の繫縛を離れたる無限の人たるべし。吾人の究むべきもの僅に地の問題のみにして止らむや。

○

國家をいふものは家庭を忘れ、家庭をいふものは國家を忘る。言を放つて天下國家を談ず、壯は壯なりと雖、閨門醜聲を絶たざるの政治家豈に能く民心を服し得むや。小心翼々、家庭の平和を祈る。過なかるべしと雖。天下國家は彼等に於て何の得るところもあらざるなり。志は須彌山頂よりも高く、行は螻蟻の如く、一歩一歩より始めざるべからず。這般の消息を解し得て以て天下國家を談ずべく、以て家庭の平和を計るべし。

○

有限の身を以て無限の想を有す。人は畢竟矛盾の一塊のみ。一塊一塊又一塊、終に集つて社會を成す。社會も亦矛盾の大塊た

るに過ぎず。此矛盾の大塊を打して渾融圓滿ならしむ、これ志士仁人經世家の職責にあらざるなきか。

○

矛盾は調和の第一歩にして、正反は融合の楷梯なり。哲人ヘーゲルの云ひける如く正し反し合して又正し反し合し、原動あり反動あり、反動の反動あり、其反動の又反動ありと、世は進歩し向上す、此向上進歩の大道を辿りて天下萬衆を指導するもの、これ達者の手腕にあらずや。古今二路なし、達者共に途を同す、天下同感の士、希くは共に手を携へて此大道を往かむかな。

○

食に鹽なくむば、其味美ならず。事に道なくむば其事妙ならず。道をいふものは事を忘れ、事を談ずるものは道を忘る。實業政治の徒に些の道念なく、宗教道德を口にするものに處世の眼識なく、道、事を離れ、事、道を忘る。宛然、鹽なきの味、其美ならざる何ぞ怪むを要せむ。

○

「千江同一月、萬戸盡逢春」、道は一のみ。向上向下、清風起る、「目前無異路、脚下無青天」時感數則、聊か以て平生の懷を陳ぶ。迂愚他の笑を招く亦妙ならずや。

現代青年の病弊

青年は時代の先驅にして、其氣風の變遷は、直に以て時代の趨勢をトするに足る。期。明治に入りて我が青年の氣風は少くとも三變轉を經たり。其初期に於ては官人全能、薩長土肥新進の青年權力を振ひ。齡、三十に滿たずして縣に令たるものあり、二十前後にして重を一省に爲すものあり、天下は青年の天下にして、其青年は皆なこれ官人たりき。此に於て年少氣鋭の徒、風を望むで帝都に集り、權門に贄緣して名を成さんことを欲し。世を擧げて官吏崇拜の病弊に陷りぬ。これ一に維新の風雲を僥倖したる官人を欽羨したると、秩祿を離れたる士族の子弟が素町人に下ることを快とせざりしとに因する夢の如きの現象にして、官人の跋扈は終に世の指彈を受くるに至り、加るに民權自由の說輸入せられて、志を官海に得ざるの徒、これを傳播し官吏崇拜の熱、漸く醒めて、政黨の勃興となり。壓制政府顚覆の聲は青年の謳歌する所となり。「我れに自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」との警語は空想に驅られたる青年の腦裏を刺擊し、「板垣死すとも自由は死せず」てふ演劇的臺詞は、當時未だ青年の客氣を消磨せられざりし退助君をして自由の神の如くにならしめ、自由を談せず、民權を口にせざるの徒は、果して亂臣賊子と爲すに至り、產を拋ち、家を棄てゝ國事に狂奔するを以て志士の能事と爲し、學に志すものは政治、法律の二科を撰み、心を文學に潛むるものは曉天の星の如く、其實業を目的とする如きものは、殆んど絕無の狀態なりき、其當時に於ける文學の如何

に幼稚なりしかを回顧せよ。好評嘖々、青年机上の友となりしものは、「經國美談」、「佳人の奇遇」、「雪中梅」の類にあらずや。而して世は未だ依然として町人輕侮の念を去らざりしなり。然り、未だ之れを去らざりしといへども、世は久しく空理空論に飽きて實事實業の更らに急なるものあるを自覺せでは止まざりき、東奔西走、産を傾け家を潰し、而して國家に對して何の貢献する所なかりしを氣付かずには措く能はざりし、殖産工業奬勵の聲は地の一角より起れり、町人輕侮の念は雲散せざるを得ざりし、青年の氣風は此に一轉し、商業學校の入學生は頓に其數を增し、實業奬勵の事業は各地に計畫せられ、世論は漸次着實に向ひしといへども、黄金崇拜の氣風は此間より熟し來りぬ。想ふに殖産工業の聲の起りし當初に於ては、未だ政治的狂奔時代の餘燼全く消えざりしが故に、其謂ふ所は多く國家中心にして、其論ずる所は富國の策に外ならざりしが、黄金崇拜の氣風漸く加はるに從ひ、初めに國家を中心としたるものも、終に自己を中心とするに至り、初めに富國の策を論じたるものも亦自家の富を計らむとするに至り、公共の精神は失せて私利の念旺んに、世は終に自利主義、爲我主義に陷るに至りぬ。此機會を利用して青年の自利心、爲我心を挑發せむとする者は、淺薄なる成功論なり。吾人は今の青年が黄金崇拜の渦中に卷き込まれつゝあるを悲む、而して殊に此淺薄なる成功論を喜ぶものあるを慨く、成功とは何ぞや。功成り名遂ぐるの義なり、功成り名遂ぐ何人かこれを望まざらむ。然れども、自ら功成り名遂げたりと自覺するほど憐れなるはなし、自ら成功を自覺するの時は、これ進

取不息を中斷するの時なり、將來の發展を阻害するの時たり、社會は駸々として一日も其進歩を止めず、進歩を止めざるの社會に於て、其歩を止めむとす。これ退嬰を敎ふるものなり、卑屈を傳播するものなり、學窓を出でたるを以て成功とすべきか、職を得たるを以て成功とすべきか、幾萬の財を集めたるを以て成功とすべきか、これらも亦或る意味に於ける成功なるには相違なし。然れども、これ吾人の滿足すべきの成功なるか。自家の衣食漸く足り、室に理想の細君あり。人生の事これを以て足れるか、これを以て足れりとするの徒は、這般の成功を以て滿足せらるべし、苟くも心を向上の一路に懸け、進取不息の精神を以て立つ、豈に這般の事を以て止るべけむや、人は個人として一家の經營を忘るべからざると共に公人として社會國家に貢獻すべきの責務あるを忘るべからず。昔の青年は重きを公人としての生活に置きて個人としての經營を忘れぬ、今の青年は個人としての經營に汲々として公人としての生活を忘れぬ、これを以て自利主義となり、爲我主義となり、終に小成功に滿足する惰弱卑屈の氣風を釀成するに至る、これ實に慨くべきの現象にあらずや。今の青年に缺くる所のものは、公共の精神なり、剛健の氣風なり。不屈の志操なり。其病む所のものは、思想の羸弱なるにあり。氣宇の宏大ならざるにあり。而して其之れを致さしめたる所以のもの諸種錯綜せる因緣の存するありと雖、羸弱なる文學、宗敎、哲學等の流行が禍する所の偉大なるものあるを忘るべからず。蓋し明治の初年、佛敎が新來の基督敎に打擊を受けて、其助勢を科學哲學に求めてより一般の思想は哲學科

學に萬能の力を付し、哲學科學は宗教の試金石となりて全權を振ひ、さなきだに自由思想の勃興と共に理性に傾ける民心を支配せしが、一般の思潮が實業に向ふの頃より、一面には哲學的考究の風を生じ、青年の斯學に志す者も亦少からず。政治論と共に流行したりしミル、スペンサーの書籍は、更らに深遠なる哲學を味はるゝに至り、カントとなり、ヘーゲルとなり、ショッペンハワーとなり、プラトーンとなり、東洋哲學も亦系統的に考究せられ、談理の風其勢ひを得たりしが、理性は人心の全部にあらず、人は理性のみを以て安心し得べきにあらず。宗教問題も亦漸く學者の舌頭筆端に上り、終に宗教の事は理性を超絶すと絶叫して感情一偏に走るの徒を生じ、理論を斥けて直覺を貴び、宗教上の實驗は煩悶に依りて初て得らるべきものなるが如くに唱導し、談理の風に反抗して神秘の義を說き、實驗の說に對して直覺の妙を語り、情に激し易き青年を驅りて、煩悶懊惱以て心靈の慰安を得せしめむとするものあるに至る。大疑の下に大悟あり、煩悶懊惱の宗教に入るの門なるを疑はず、然れども、これ唯一の門にあらず。世には些の煩悶なく懊惱なくして精神的慰安を得るの人あるを忘るべからず。これをこれ忘れて煩悶を以て慰安を得るの唯一の門なるが如くに唱へ、活氣充溢、活社會に活運動を試むべき青年をして、心を秘奥なる人生問題に傾けしめ、隱者然たる口吻を學ばしむるに至る、これ豈に現代青年を毒する羸弱の思想にあらざるなからむや。更らに文學に觀むか、國會開設の前後より欝然として勃興し、又往時の淺薄なる政治小說の類にあらずして長足の進歩を爲したり

といへども、四五の大家を除きては、理想淺劣、名を寫實に假りて、安りに家庭の和樂、戀愛の神聖を說き、情に熱し易くして、やゝもすれば理を忘れむとする青年を誘惑するの弊なしといふべからず。現代の青年は多くこれらの惡感化に浸染せられ、加るに黃金崇拜の風潮は、日一日其度を高め來りて、これを毒しこれを魅するが故に、汲々として自家の安逸を計り、進むで此驚瀾怒濤を排して、進取不息以て人生の本義を全ふするの勇なく、僅かに小成功に安んぜむとす。嗚呼これ實に最も悲むべく痛むべきことにあらずや。青年は時代の前驅なり、多くの革新は青年の手によりて成就す。此青年にして剛健の氣なく不屈の心なく、進取の精神なき、これ實に時代の不幸なり、國家の凶兆なり。吾人の此言を成す、豈に徒らに憤惋の情を洩すのみならむや。

女性問題の根本

世の女性問題を云ふもの多くは其の根本を逸して技末に走り喋々喃々一の捕捉する所あるなし。笑ふべき哉。彼等は男女の區別をも適當に定むる能はざるなり。徒らに當世流の庇髮或は丸髷或は島田、其顏に紅紛を施し、其帶を太皷にし若くは其袴を海老茶にしたるを以て女性とし。エンサカホイの掛聲と共に坂に車を推すの女性、其顏に粉なく其髮に油なく、赭顏亂髮の徒を算することを忘れ、女性は美の權化なり、愛の化身なりとい

ふ何等の滑稽ぞ。試に南洋土蠻の風俗を見よ、去て中央亞弗利加蠻族の生活を見よ、何れか男何れか女容易に判斷せらるべきにあらず。男女の根本的區別は其生理的にあり。何をか生理的といふ、

一　身長の差異

男平均五尺二寸八分、女平均四尺九寸五分、

二　體量の差異

男平均十四貫二百〇四匁、女平均十二貫三百二十八匁、

三　體質上の差異

(イ)男性に鬚髯多く、女性には少し、

(ロ)男性の乳房は小、女性は大なり、

(ハ)男性に腕部腓部肉付多く、女性は臀部大腿部に肉付多し、

(ニ)男性に比して女性の筋肉は一般に脂肪に富み、皮膚も亦滑なり、

(ホ)男性の聲は太くして女性は細し、

の如きは何人も知悉するの區別なれども、單にこれらの區別のみにては女性にして男性らしく男性にして女性らしきものなしと云ふべからず、唯だその月經、妊娠の二事に至ては男性に絶無にして女性には殆んど必有のものなり、此二事は實にこれ兩性の根本差別にして此差別を深く根底に置くにあらずんば女性問題は終に解決し得べからず。更らに脱白に之れを云はゞ其生殖作用に於て女性は常に消極的保守的なるの地位に立つものなり。此消極的なり保守的なるの特點はこれやがて女性問題解決

の根本にあらざるなきか。消極的なり保守的なるが故に家居に適して社交に適せざるにあらざるなきか、天は二物を與へず、彼れには受胎、姙娠、育兒のことあるが故に、彼れは出でゝ社會的活動を試みるに適せざるなり。彼れは家居して以て男子を動かすを得べし、而かも自ら立つて社會の驚瀾怒濤に處する能はざるなり、犯罪の裏面には女性あり、彼れは男性を使嗾して回天動地の事業を成さしむべし、されど自ら其手を動かさんには、あまりに保守的あまりに消極的にして、且つ其身體も亦纖弱なるを免れず、吾人は多くの英雄豪傑が賢妻良母の內助薰陶により知ると共に又一國の禍亂が多く閨帳の中に胎胎するを忘るゝ能はず、ナポレオン然り、豐太閤然り、楠正行然り、山內一豐然り、フオーセット然り、而して保元の亂然り、承久の亂然り、應仁の亂も亦然り、清國の現時も亦然らざるなきか、幸なる哉、賢妻良母を有するの家、禍なる哉、妬婦驕女を有するの國。

論は端なくも岐路に入りぬ。女性の生理的現象は如上の如く保守的消極的なるが故に、これをして社會に出でしむるは其天性に反せしむるなり、否な却て彼等をして墮落せしむる所以なり、近時頻々として女學生の不品行を謳はるゝもの彼等が双親の膝下を離れて社交に加はり、夢の如き理想を以て學窓の下に靑春を送らしむるが所以にあらざるなきか、若し其れ彼の工女が墮落其頂點に達し、時々殺兒墮胎の大辟を出すに至りたるもの亦其天性に反きたるの罰にあらざるなきか。彼の有夫姦の明治廿三年には三百二十五人ありしもの明治三十年には五百二十六人となりしが如き其一例にあらざるなきか。鈴木券太郎氏の「犯

罪論及女性犯人」は、女性問題の根本を解決せむと試みたる書なり、中に曰く、

婦女自から生活の戰場に出でゝ世事を經營するに及びては男と等しき犯罪傾向を發展するは天則なり、女出でゝ勞して男の生業を奪ひ男と同じく計算を操り男と同じく生活的壓迫を感ずるに至らしむるは即ち女をして殆んど男たらしむるものなるにより天則の檢討は男に下すべき責任を女にも亦同じく課す、經濟上の生活競爭場裡に女を驅ること愈多ければ女性犯人を出すこと愈々多し

と、これ實に破るべからざる天則なり、仔細に男女の生理的區別を看取したらむものは何人も亦女性職業問題に就ても三思を要すべきものあるを知り、其教育問題に就ても再考を促すべきものあるを見む。鈴木氏のしば〳〵引用せられたるケラー嬢の文中には、更に生物學上男女の差を論じて、

抑も生理學上男は女よりも破壞的なり、一切の動物、早期の種族に於ては性的體制の差の故よりして雄は强き體格、大なる情熱太き腦容を賦せらる、雄にありては是等のもの至要なりと、母及家族の保護食物の供給は實に雄に於て待てばなり、原始時代に於ては此等の事即ち生存の唯一目的なりしなり、今日に於ても蠻野の種族は乃ち此くの如し。雌は家族の事に消日し、從て破壞的性質を要するよりも建設的の性質をより多く要するなり、雄が不規則なる時間に勢力の大費消を爲すことは吃緊なりとせらるゝも雌が勢力保存のこと亦必要なりしなり云々

これ男女其用を異にして其功を一にする所以にあらざるか、原始人類の時代より今日に至るまで女性の道德上の地位は大に進歩したりといへども、其家居的にして保守的なり消極的なるは千古其軌を改めず、何者のハイカラ漢ぞ、漫に女性を煽動して社會の表面に出でしめむとする、女性は表面に出でざるも表面に出でたると同一若くは同一以上の貢獻を社會に爲し能ふべきなり。まことや、北畠親房が、

凡そ男子は稼穡をつとめて、おのれも食し、人に與へて飢えざらしめ、女子は紡績を事として、みづから衣、人をして暖かならしむ、いやしきに似たれども人倫の大本なり

といへる如く其用を異にして其功を一にすべきは東西其見を同うす、吾人はショッペンハワーの云へるが如く、

女性は唯だ人類蕃殖に於てのみ存するものにして其他の目的の爲めに造られたるものにあらず

といふ如く極論するものにあらずといへども、又一面の眞理の此中に含まれたるを否定する能はず、漫にこれを神聖視し、其勢力を過大にして、彼等の自負心を昂むるものは却てこれ女性を毒するものなり。松にからまれる藤の花の如何に美はしきかを思へば、女性の美なる所以も亦看取し難からざるにあらずや。

無道德主義の道德

◎愚なる哉、今の世の道德。徒に人間の本能を制縛して皮相の形式に流れ、靈活なる人類を擧げて土偶の如くならしめんとす。何等の愚ぞ。吾人は寧ろ無道德主義を鼓吹せむ。

◎無道德主義、言頗る奇矯なるが如しと雖、實は今の世の所謂道德主義に反するなり。今の世の道德主義は形式主義なり。外見主義なり。形式を重んじ外見を貴ぶが故に不自然なる制慾主義となり、其名美にして其實の醜なるを顧みず、虛偽虛飾の頭上に道德の名を冠せしめむとするもの也。

◎無道德主義は平凡主義なり。浮世の毀譽と褒貶とに關せず、俯仰、天地に恥ぢざるの行爲は斷々乎として行はむとするもの也。これ新奇にあらずして古聖先賢の喋々する所、今の世の道德は社會的制裁を重んじて良心の制裁を輕んず、吾人は良心の制裁をいふて社會の制裁を顧みざらむとするもの也。

◎動機にして完全ならば何事か不可ならむ。世の制裁を恐れて左盼右顧、何事も爲す能はざるもの、何ぞ眞道德と云ふを得べけむ。制慾主義の道德は人をして因循ならしめ、形式主義の道德は人をして狡獪ならしむ。吾人の無道德をいふ、豈に殊に奇を衒ふの言ならむや。

◎太陽は汚穢を照らせども、毫も其光明を汚さず。苟も公明の心を以て對す、何者か之れ吾れを汚さむ。之れ汚すものゝ非にあらずして、汚さるゝものゝ非なるなり。今の世は汚すものを咎めて汚さるゝものを咎めず。これ豈に滑稽の極にあらずや。

◎酒を飲むで軒昂、一世を罵倒するものあれば、直に以て不道德と爲し、面從腹背、猫の如き狐の如きの徒も、僅に外見を衒へば以て道德家とす。何ぞ夫れ道德家の憎むべくして、不道德家の愛すべきや。

◎曾て無住の沙石集を讀む。中に老僧あり、常に徒弟を戒めて曰く、婦女は虎の如し、決して之に近づくべからずと。一日其徒弟を伴ふて村里に入る。女あり盛裝して道を過ぐ、弟怪んで僧に問ふて曰く、これ何者ぞと、僧戒飾して曰く、これ平生教ふる所の女なりと、徒弟歸來言ふて曰く、美なる哉婦女、予は更に師の教ふる所の虎なるものを見んことを欲すと。これ一場の戲謔なりと雖、以て制慾主義の道德の如何に滑稽なるかを描き盡せるものにあらずや。

◎安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も亦涼し。古人云はずや「座禪せば四條五條の橋の上」と、衣香扇影に眩せられずして初めて眞の道德を得べし。情を殺し慾を制して僅かに維持せられたる枯木死灰流の道德それ何爲ものぞ。

◎枯木時に情熱の爲めに燒かれ、死灰も亦復び燃ゆること無きを保せず、かゝる似而非道德に隨喜する、現代こそ愚かなれ。

◎哲人スピノザいふ、世を笑ひ世を悲む勿れ、審かに世を解せよと。審かに世を解して、寂然不動の心に住す。これ禪家の所謂靜中動あり、動中靜あるもの、無道德の道德は此に於て光輝あるを得べし。制慾主義の道德は隱遁的となり、形式主義の道德は死滅的となり、外見主義の道德は皮相的とならざるを得ず。

◎吾人の執る所は現世的なり、活動的なり。精神的なり、精神

的なるが故に斷々乎として他の毀譽を容れず、活動的なるが故に活社會に處して進取すべく、現世的なるが故に未來を憧憬せず、爲さむと欲する所を爲して憚る所莫し、あゝこれ無道德乎、大道頽れて仁義あり、吾人は今の世の似而非道德の愚劣なるを嗤ふ。

◎地方に於て淳朴なるの徒も、都會に於ては誘惑せられ、家庭に於て謹嚴なる人も社會に於ては遊惰となる。現代道德の弊は笑ふべきにあらずして、寧ろ悲むべきなり。嗚呼此死滅的道德を奈何せむ。

宗教の精神病態

虛心平氣で池上の御會式に團扇太鼓を叩いて歩く、意氣な若衆や島田髷の姉さんを見ると、實に彼等は一種の精神病に罹つてをるのではなからうかと感ぜられる、黑紋付仙臺平の紳士然たる男が「救け玉へ天理の命」と踊り廻るも、北國邊の老媼が法主の行水を藥のやうに服するのも皆なこれ狂氣染みたる行ではなからうか。私は曾て御嶽に詣で、瀑布のあたりで、嫌がる狂女を無理に瀧に浴せしめんとするのを見て異樣の感があつた、狂女は寒いから嫌だ〳〵といひ、付添ひの人はこれを神樣の加護があるといふて、一生懸命に瀑下に押しこまうとする、逃げやうとする、抑もこれ何方(どちら)が狂氣であらう。私は專門のことは存じ

ませぬが、精神病の定義に就ては古來いろ〳〵な學説があつて一定はいたしませぬ、或る學者は意思の自由を損傷したのがこれであるといひ、或る學者は腦髓病症の心意に發現したものであるといふ、さま〳〵ですが、私共は先づ常識にはづれたる心を以て行ふてゆくものは精神病態と見てもよからうと思ひます、即ち智力に於ては判斷に誤謬を生じても知ることが出來ず、月世界に達する楷梯を造らうとして千辛萬苦するやうなことになり、情に於ては其平均を失ふて極端に走り、人の前でも憚ることなく踊り廻り、これを制裁する意志なく、甚しきは公然猥褻の行爲をなすに至るやうなもので、兎に角精神が異常になつた場合をいふのであると考へてよからう、サテ單に精神が異常になるといふことは酒に醉ふて陶然たるとき、または事毎に蹉跌して失望の極に達した時の如き、共に精神に異常を呈するのであつて、これをしも精神病者といはねばならぬことゝなる、併しそれとこれとの違ふ所は其度の一層強く其時間の一層長いのであつて、どこからが精神病、どこからが通常人と區別するのは、丁度動物と植物との區別が極端と極端とでは、誰にでもわかるが、其限界に至ると如何にも識別さることが出來ぬやうに、暴れ廻る狂者と通常人との間は誰にでもわかるが、極く微弱な精神病者と通常人との間は、實に一歩の差であるのである。されば又何人も精神病者となるの素質のあるものと見ても差支はないのであります。

サテ通常精神病者の陷り易いのは、誇大と微小との兩極端で、(一を躁狂他を鬱狂と分つ學者もあるさうですか)これは通常の人

を見ましても放膽な人と小心な人とあつて、人を人とも思はず、何んでも自分の思ふた通りにやりつけるといふ風の人と、何事につけても神經過敏で、先きから先きを考へる引つこみ思案の人とある如く、精神病者にも自分が非常に偉くなるのと自分が非常につまらなくなるのとの二つがあります、或る學者は前者を誇大妄想の患者といひ、後者を微小妄想の患者と云ふてをります、此誇大妄想の患者の中には己れが云へばナニ總理大臣でも、必らず聞くに違ひない、一番宮内省へ忠告してやらうなぞといふて出掛けて、守衛の爲めに警察へ送られるのもあるし、身が病院に在りながら金殿玉樓にあるといふやうな幻覺を起し、紙片を以て貨幣ぞと心得、サア貴樣にやるなぞと威張り、これに反對すれば躁ぎ廻り、微小妄想の患者の中には、常に何人かの自分を殺しに來るやうに感じ、人が話をして居れば自分を殺す相談だと推し、惡魔が自分の周圍につき纏ふと思惟し、幽鬱の極自殺を計るに至るやうなものもある、彼の天狗憑の如きは多くは誇大妄想の方で、己れは鞍馬山上に天狗に劍道を傳へられたりと稱し、誰だと思ふ、我れこそは秋葉三尺坊なりといふやうなのがこれです、狐憑の如きは多く微小妄想に陷つて、我れの腹の中には狐が居る、何を食つても狐に食はれてしまうのであるなぞと思ふの類です、更らに宗教的に申しまするには、我れは金光大明神なりといふた金光教の藤井文二郎、我れには天理王の命乘り移たりといふ天理教祖中山ミキの如き、若くはバージンマリヤは我を迎ひに來たりとか、我は天帝の第二子基督の弟なりといふの類は誇大妄想で、我は惡人なるが故に、地

獄の火の車は常に我を迎へり、それ鬼が來た、それ鬼が來たと躁ぐ連中、五濁惡世の我等は罪深いものぞと泣き悲む信徒は、微小妄想に陷つてをるのが多い。かう考へて見ると基督が自ら神の子なりといひ、日蓮上人が自ら本化上行菩薩の化身なりといはれたのは誇大妄想で、善導大師が彌陀の淨土を慕ふて死を望まれたのは微小妄想ではないか、ヘラクリトスの泣き、ダイオゼニスの笑ふのも、矢張り精神病ではないかと思はれる、殊に高僧の傳記に、しばしば見る所の佛の示現や夢想は、精神病者の見る所の幻覺の如きものではなからうか、然り精神に一種異常なる狀態を呈したのには相違ない、併し我等はこれらの天才を以て精神病者なりと斷ずるの勇氣はない、天才と狂氣とは一歩である、人が或る一所に其注意力を集注するときに精神に異常を來すのは免れざる所である、精神に異常を呈するほどの熱心でなければ、到底天才として尊ばるゝほどのことは出來ない、我等は寧ろ天才の異常なる精神に感ずるのである、想ふに天才と狂氣とを區別すべき標準は、常識の水平で其常識以上のものは以て天才と稱すべきも、常識以下のものは終に精神病者たるを免れない、彼等天才は精神の異常なる點に於て狂者と一歩であるが、彼等は常識以下の者ではない、併し此天才の異常なる精神を普遍ならしめんとするものは、偶ま精神病態に陷らしむるの所由となるのである、我等の常識主義の信念を鼓吹して異常識主義に反對するのはこゝである、常識主義は平凡であらう、併し精神病態に陷るの憂はないのです、今の靈驗夢想等を說て常人を導かんとするの宗教は、實に危險な者であります。

一壺天

社會觀

時代には時代の思潮あり、社會には社會の精神あり、以て過去を縮寫し將來を暗示す、此暗示を辿りて時代を警醒し社會を指導するもの以て先覺の士と名くべく、徒らに過去を追懷することを知て現代を呪詛する頑迷固陋の徒は、實にこれ社會進歩の途上に横る毒蛇ならむのみ。若し夫れ現代を謳歌することを知て更らに將來に於ける進歩發展の途あるを知らざるものは、まことにこれ太平の逸民、有て害なしと雖、之れ無きも亦妨げざるなり。

○

足は地を離れずといへども、眼は高く天を望むべし、人は時代の制肘を免れずといへども、又高く之れを跱跳する底の覺悟なかるべからず。

○

自ら其缺陷を覺知せざる社會ほど危きはなし、驕る羅馬の久しからざりしもこれが爲めなり。平家五十年榮華の夢の南海の春吹く風に吹き荒されたるもこれが爲めなり。

○

社會の發達は猶ほ個人の成長の如き乎。太古邈たり幼者の如し、我が國史に於て青年時代に相當すべきものは、「七重八重咲く花の匂ふが如く今盛りなり」し奈良朝より「大宮人は櫻かざして今日

も暮らし」つる平安朝なるべく、三十にして立つ、國民的自覺の時代は武門政治の確立したる鎌倉以後に當るべく、德川氏の創業は不惑の齡、爾來漸次老境に向ひ、明治維新に際し、舊日本は斃れて新日本は生れぬ。明治の日本は實にこれ年少氣鋭の日本なり。然り、年少氣鋭の日本なり、未だ模倣の域を脱せざるの日本なり、功名に酔ふて思慮分別を缺くの日本なり。

○

史家はいふ、歐洲の歴史は文質燦爛たる希臘に於て青年の才華を煥發し、雄略宇内を呑むの羅馬に於て壯年の意氣を示し、羅馬滅後漸次老境に沈淪して何の爲すなく、宗教改革に至て初めて新歐洲は生れぬと。時代の革新は人心の革新より始めざるべからず。宗教改革ありて政治の革命となり、社會の刷新となる。

聖德太子先づ三寶を興隆して人心の革新を計り、繼で政治上に於ける大化の革新あり、桓武の平安奠都は政治上の革新なり、而して傳教弘法の宗教改革これに伴ひ、賴朝の政治上の改革あつて、相前後して法然、親鸞、榮西、道元、日蓮等の宗教改革あり、不審しきは明治の社會なる哉。政治上の改革あつて既に四十年に垂んとす、而して未だ宗教の革新を見る能はず。見る能はずと雖、機は既に熟せり。志士夫れ起つべきなり。

○

社會は共同生活なり、人は其一員として働く、こゝに勞力あり、必らず其報酬なかるべからず。しかも孜々として働き、尙ほ衣食に窮するものあり、これ豈に一方に些の勞力なくして豐かに

衣食するものあるが爲めにあらずや、社會は先づ此不調和より革新せざるべからず。

○

業に貴賤なし、等しくこれ社會の共同生活を助くるもの、社會は堂々天下の政權を握るの内閣總理大臣を要するが如く、終日營々として田を耕すの水呑百姓を要す。其の間何の輕重かあらむ、漫に貴賤の別を立つるものは、未だ以て社會の眞相を語るに足らず。

○

安逸を以て貴とし、勞働を以て賤とす、何等の妄ぞ。世に安逸より賤むべきはなく、勞働より貴むべきはなし。

○

人は一身の經營を忘れざるが如く、社會の經營を忘るべからず、否な一身の經營を忘るゝとも、社會の經營を忘るべからず。

○

或人いふ、電車の中ほど滑稽なるはなし、乘客を滿載して「込み合ひますから懷中物御用心」といふ。これ一面掏兒をして技を逞ふするの機會を與へて、一面乘客を警告するものなり。若し込み合はざらしめば、掏兒ありといへども、其技を逞ふするを得ざるべし。「懷中物御用心」を警告するの親切あらば、何ぞ乘客を減じて込み合はざらしめざると。今の社會は唯罪惡の憎むべきをいふて、此憎むべき罪惡を釀成するの社會組織の罪を云はず、宛然、乘客を込み合はしめて懷中物御用心と絶叫するもの。

罪惡は社會の病的現象なり。一面これを抑止すると共に、他面に於て社會自體に此黴菌を生せしめざるの策を講ぜざるべからず。境遇は個人を左右す、個人の罪惡は多く社會組織の腐敗より胚胎し來る。

○

健全なる社會は各人をして喜んで其共同生活に貢獻せしめ、何人をも、社會尺度（ソシアルスケール）以下に墮落せしめざるにあり。これ理想か。然り吾人の努力によつて早晩實現せざるべからざる理想なり。

○

社會の一面には猛烈なる生存競爭の行はるゝと共に他面には渾然たる調和融合あり、此調和融合の心を以て此生存競爭に對す、こゝに初めて其發展進歩を計るべし、漫に生存競爭をいふて此調和融合を云はざるものは、油を注がずして機械を動かさむと欲する輩のみ。油なきの機械は終に破壞し、調和融合なき生存競爭は土崩瓦解に終らむ。

○

唯だ生存競爭あるを知て調和融合あるを知らざる社會は乾燥無味の社會なり。十露盤以外に何物をも認めざるの社會なり。美醜の感なく、善惡の心なくして利害の念のみに驅らるゝの社會なり、利害の念に驅らるゝが故に道義は皮相に流れ、趣味は下劣に陷る。これ豈に現時の社會狀態なるなからむや。

○

俳優藝妓は趣味の中心なり。紳士學び、令嬢學び、終に一代の流行を成す。悲哉、趣味の低劣なる。

○

馬鹿正直は世に笑はれ。狡猾奸譎の徒は人に持囃さる、現時の社會は實にこれ漫性不道德加答兒に罹れるなり。

○

等しく富士山なり、古人は見て以て「白扇倒懸東海ノ天」とせり、今人に此趣味なく、仰望していふ、「此山は海面を拔くこと何千メートル」と。

○

西洋人の夫妻相伴ふて行くや、横線的なり、互に手を携ふ。日本人の夫妻相行くや、縱線的なり、夫先づ歩みて妻これに隨ふ。今の若き人は西洋的なり、老人は尙ほ古風を存す。

○

横線的なる西洋の道德は平等主義なり、縱線的なる東洋の道德は差別主義なり、平等主義なる西洋に同胞博愛の思想旺んに、差別主義なる東洋に君臣、父子、夫婦、長幼の別、嚴然として存す。

○

平等主義なるが故に、長上、苟くも其宜しきを得ざれば直に反抗して自由民權の思想起り、差別主義なるが故に、長上の命ずる所、唯だこれ從ふ服從の美德を生ず。東西兩洋一長一短、未だ遽かに一を取て他を捨つべからず。

○

菅公は一代の儒宗なり。「然れども彼れは支那崇拜者にあらず、曾て誡めて曰く、

凡そ神國一世無窮の玄妙は敢て窺ひ知るべからず、漢土三代

周孔の聖經を學ぶと雖、革命の國風、思慮を加ふべきなり。と、廣く世界の國風を入るゝに於ても、亦這般の思慮なかるべからず。

○

儒教革命の風は我が日本に入りぬ。しかも萬世一系の皇室を汚さず。唯だ將軍に對しては遠慮なく適用せられて禪讓放伐の跡を見るに至りぬ。或る人いふ、武門政治は皇室の深患なりしと雖、又實に一種の責任内閣にはあらざりしかと。一種の觀察なり。

○

一夕の晩餐に百金を拋て顧みざるものあり、一日の食費僅に六錢を得るに汲々たるものあり、一時間に二百圓の報酬を得る義太夫語あり、一ヶ月に二圓四十錢を得る職工あり。不平等の社會なり、不調和の社會なり。

○

藝妓の纏頭には數圓を惜まざる紳士も、袖乞には一錢を惜む。虚榮の社會なり、見得坊の集團なり。

○

金を借りにゆくの紳士は多く腕車を驅り、金を促りにゆく債主は多く徒歩す。齋藤綠雨氏の「ひかへ帳」に、

乘れる人はヒーローを買ひ、曳ける人はキングを買ふ。節してヒーローを買ひつゝ、節せざるキングの料をも拂ふが如き奇觀は、煙草屋の店頭に限らず、到る處に見受くるなり。

といへると同一の世相なり。

○

世相は到底理屈を以て判すべからず。人は畢竟矛盾の動物のみ、不理屈の中に理屈あり、理屈の中に不理屈あり。能く此機微を看取して以て初めて社會の革新を計るべし。宗教改革の偉人ルーテルが、「世に酒と女と歌とを好まざる痴漢なし」といへるもの奇矯なるが如しといへども、人生の眞相なり、彼れに此世相觀あり、以て革新の大業を完成す。

○

希臘の哲人プラトーンの饗宴を張りて知人を招くや、ダイオゼニス招かざるに到り、身に襤褸を纏ひ泥履を以て戎氈を踏みて曰く、「かくしてプラトーンの高慢心を踏む」と、プラトーン笑て曰く、「汝が襤褸より汝の高慢心迸り出るにあらずや」と。世には貧乏を以て人に誇るものあり、無慾を標榜して名を得むとするものあり。

○

世相、千狀、社會、萬態、能く此狀態を看取して其革新を口にすべし、机上の空論、世に用なく、學究の所論多くは社會と沒交渉なり。

獨嘯錄

戰捷喜ぶべきか、然り喜ぶべきことには相違なかるべし。されど、悲むべき部分のそれよりも大なるを奈何せむ。戰捷は墮落の根本なり、風俗の壞亂これより生じ道義の頽敗これより萠し、物質主義の全盛これより興らむ。否な已に其の萠芽は社會の一隅に起りつゝあるなり。漫に祝勝の酒に醉ふものは、未だ共に國家百年の大計を語るに足らざるなり。

○

戰敗は國民を戒飾し、戰捷は國民を放縱ならしむ。

○

京師を征服したる阪東武士は京女の艶姿に敗れ、江戸を征服したる薩長土肥は新柳二橋の阿嬌に降服せざりし者少し。勝者の敗か、敗者の勝か。

○

今の世を元祿に比ぶることを許さば、何者か滿都の惰眠を警醒せる赤穗義士たるものぞ。迫害と壓抑との下にありて意氣の壯なる社會主義はそれにあらざるなきか。

○

予は社會主義を賛するものにあらず、然れども社會主義ある日本は實に幸なる哉。予は唯だこれによりて現代の思潮に生氣を見る。

○

學者、教育家、宗教家、悉く談理の風に陷りて目を社會の革新

に注ぐものなし。これ豈に喜ぶべき現象ならむや。

○

世に慨はしきは、服從の美を知つて反抗の更らに美なるものあるを知らざるに過ぎたるはなし。

○

乳臭未だ失せずして早くも家庭を說き戀愛を談ず。忌はしき哉。今の青年。吾人は寧ろ自由を論じ民權を口にしたる壯士跋扈の時代に謳歌せむ。

○

小說を看よ、演劇を看よ、其最も賣れ行きよく、其最も大入を占め得べきは、不倫なる戀愛を脚色せるものならずや。

○

曰く食道樂、曰く繪葉書、曰く元祿模樣、曰く元祿下駄、曰く小夜ごろも、曰く流經丸、曰く號外、曰く旗、曰く提燈、曰く男女交際祕術。

○

辭典の流行は學問墮落の兆候なり。勞少くして知つた顏のなし易きもの最も行はる。

○

人に道念なく、士に義憤なし。沈滯の社會なり。混沌の社會なり。生命なきの社會なり。然り精神的死滅の社會なり。

○

敎育の目的は英雄豪傑を造るにあらずして、常人を造るにありと、これさあるべし。然れども常人をして更らに向上進取する

の責あるを教えざる教育は社會を平凡化するものなり。

○

倫理は行ふべきものなり、これを口にするのみにて何の詮かあらむ。眞理は世と相渉つて初めて光あり、これを筆にするのみにて何の要かあらむ。

○

文明の進歩は物質の發達なり。靈性ある人類をして機械の奴隷たらしむるものなり。

○

國家はよし强者の權利によりて建設せられたりとするも、其目的は弱者の保護にあり、弱者の權利を蹂躙するの國家は亡滅あるのみ。

○

至誠以て事に當るべし、其成ると成らざるとは問ふ所にあらず、これを勝海舟に聞く

世間の人は動もすれば芳を千載に流すとか、臭を萬世に流すとかいふて、それを出處進退の標準にするが、そんなけちな了見で何が出來るものか、男子世に處する、唯正心誠意を以て現在に應ずるだけの事さ、あてにもならない後世の歴史が狂と云はうが、賊と云はうが、そんな事は攝ふものかと、これ至言なり。男子の行動須く此くの如くなるべし。

○

世亂れて英雄を想ふ、これ凡俗の事のみ、苟くも世に志す、自ら英雄を以て任じ、豪傑を以て當らざるべからず、人々英雄の

資あり、個々豪傑の性を有す、何の卑屈漢ぞ、漫に他に英傑の士を待たんとする。

（明治三十八年十月）

新武士道

新といふ字を冠しはしたが、武士道を論ずるは、少し時勢遲れの感を免れぬ。時勢遲れたるを免れぬやうであるが、予は新にこれをいふべき必要を認めるのである。そは何故かといふに、從來武士道を論ずるものの多くは在來の武士道の長所を發揮するにこれ努めて其短所弊所を看取することなく、甚しきは封建時代の遺風を直に二十世紀の日本に用ゐやうとするやうな愚論を耳にするに至つた。武士道は我が民族の精華で、もとより保存すべき氣風に相違ないが、從來のまゝ之れを維持して以て現代幷に將來に應用せむとするは、頗る當を得ないことであると思ふ。

武士道の精神は立派なものであるが、これに伴ふ短所も亦少くないのである。抑も武士道といふものは、我民族固有の精神に儒佛の感化を受け、源平二氏勃興の時代から絢爛の美を逞するに至つたので、當時武門武族を以て稱せらるゝもの平氏にあらずむば源氏、源氏にあらざれば平氏であつたのであるから、互に相砥礪して、源氏の武士に笑はるな、平家の武士に誹らるゝなと、一族の名譽を重んじたものであるから、屋島の浦に弓を拾ひし義經の膽勇となり、壇の浦に扇の的を射ぬきし那須の與一が決死の覺悟となつたのである。北條氏の治政となつて此美くしき花には質實の果を結び、日本の武士道は略ぼ大成し、殊に生死透脱の敎旨を宣傳したる禪の感化は、ます〳〵これを鞏固にしたが、南北朝の時代に至つては、一族の名譽といふ考は薄くなり、利害を打算して向背を決するやうになつた。これは武門武族の競爭にあらずして、皇統の爭ひとなつたものであるから、いづれに屬するも其名の正しからぬことはない。ソコデ利のある方に傾くといふやうな人情を生じ、士道頗る頽廢したのである。そは菊池武茂が鳳儀山に納めた誓文の一節を讀んでも明かである。

武茂弓矢の家に生れて朝家に事ふる身たる間、天道に應じ、正直の理をもつて家名を擧け、朝恩に浴し立てんことは三寶の御許を蒙るべく候、其外私の名聞利欲に義を忘れ恥をかへりみず、諂へる當世武士の心を永く離るべく候。

とある、當世武士の心とは氣慨あるものゝ指彈したところであらう。其後戰國時代となつて、ます〳〵利害關係に動くやうな狀態となり、德川氏文敎を興して攻伐以外に人道の大義を宣揚

してから、支那流の君臣關係論は、主從の間に用ひられ、先には人生知己に感ず、功名また誰か論せん的の日本武士の氣風を、強いて一定の典型の下に收めんとて、朱子學を以て家學とし、これを以て武士の精神の淘冶を計つたが爲めに、一面主君の爲めに、命を棄るといふ氣風は、一轉歩して御家の爲めとなり、終には御家の爲めには主君をも斥けるといふ氣風となり、他面に於ては從來の滑脱自由なる武士的精神は、堅くるしき形式的のものとなり。重んずる所の者は社會的制裁となつて、又意氣の如何を問はざることゝなつた。問はざることゝなつたと云ふものゝ固有の感情的にして且つ直覺的なる武士的精神は、その爲めに阻害せられず、御家の爲めには、いつでも命を捨るといふ氣風を持續し、殆んど自己の人格といふものを意識しなかつた。全く御家とか君主とかいふものゝ中に沒了してしまつてをつた。併し功名の念は盛んで、生は一時にして名は末代なりといふ考が一般に行き渡りて。利害の打算なき清き氣象が養はれたのである。故に武士道の長所は

一　身命を惜まざること

二　社會的制裁を重んじたること

三　自己を沒して君家の爲めを計ること

等であつたが、其短所は

一　直覺的にして考量を欠き

二　社會的制裁を重んじて功名に走せ

三　人格の尊重を忘る

ることであつた。直覺的は美はしいが、全然利害の考量を欠く

のは完全なる精神的活動とは云へない。彼等はあまりに直覺的なりしが爲めに、社會の形勢を見るに疎に、社會的制裁を重んじたるが爲めに「腹が減つてもひもじうない」といふ如き狂情的行爲となり。七十二文の蕎麥代に命の安賣を爲す如き痴態を演ずることゝなり。人格の尊重を忘れしが故に服從の美なるを知て、權利の伸張を云はず、國家存立の本義を失却するに至つたのである。

維新改革の後泰西の風潮、滔々として入り込むと共に、此の武士道に大變調を與へ。直覺的なりしものは全く打算的となり。其行爲を制するものは、善惡の觀念にあらずして、利害の考量となり。黃金萬能、金錢全勢力の狀を呈し、美しき武士的氣風は漸次に喪失し、其社會的制裁を重んじたりし、他律主義の道德は、變じて自分勝手の爲我主義となり。自姿放縱、世の毀譽を顧みざるを以て大人の風格の如くに心得、權利思想の勃興はさなきだに冷却せる民人の頭腦を一層冷却せしめ、何事をなすにも自己を中心とし上下和睦、億兆心を一にしたりし我が國の暖かき國風は、冷やかなる權利義務の關係となり。法律以外に何等の制裁を認めず。從來の武士道の短所を失ふと共に其長所をも沒却し、世を擧げて黑闇の巷に葬られむとするのが目今の狀態である。即ち

一　一切の行動悉く利害を考量す

二　社會的制裁を顧みざる爲我主義たり

三　自己中心に流れて公共の精神を欠く

のである。此時に當り武士道の興起を想ふのは當然のことでは

あるが、唯だ武士道の名の美はしきに醉ふて、其短所弊所をも賞揚せんとするのは、角を矯めて牛を殺すの類で、決して經世家の賛同すべきことではない。吾人の新武士道の興起をいふのは、これが爲めである。新武士道とは何ぞ從來の短を補ふて其長を助けむとするのである、御家の爲めといへる思想を擴充して國家の爲めとならしめ、國家の爲めといへる思想を、更に擴充して世界人類の爲めならしめむとするのである、已に世界人類の爲めといふ其行動に多少の考量を要すべきは云ふまでもない。小範圍のことは或は直覺的に成功することがあらうが、大範圍の事になるとどうしても考量する所なくして出來るべきものでない、併し其標準は利害にあらずして善惡の念でなければならぬ。善惡の標準は何によつて定むべきか。吾人はこれを自己の良心に訴へんとするのである、良心の命令はこれ神の聲なり、佛陀の靈光なりと信ずるのである、併し吾人の所謂良心とは常人の認めていふ所のものゝ如き淺薄なるものではない。實に自己の心裏に伏在する大我を指すものにして、まことにこれ宇宙精神と脈絡貫通するものである。グリーン一派の所謂眞我(True-Self)中江藤樹先生の所謂良知の主人公、佛家の所謂佛性である。此良心の命令を動機として行動せよといふので、徒らに他の毀譽褒貶に心を勞して左し右せむとする如き、社會制裁に重きを置くの徒に與みせない。吾人の謂ふ所の制裁は社會制裁にあらずして良心の制裁なり。吾人の謂ふ所の道德は他律主義にあらずして自律主義である。かういふとそれでは自分で善なりと思念したことは、直にやつても差支がないといふ直覺說のやうで

はないかといふ人があるが、決してさうではない。凡そ道德的行爲には、必らず動機と結果とあるもので、動機が善でも、結果の惡いことがあり、動機が惡でも結果の善いことがないとはいへぬ。併し吾人の說は動機のみを撰むで結果は如何樣でもよいといふのではない。動機と結果とに善惡をかけて四句分別にすると左の如くなる、(一) 動機惡にして結果惡なる者、(二) 動機惡にして結果善なる者、(三) 動機善にして結果惡なる者、(四) 動機善にして結果善なる者、吾人の企圖するのは第四の塲合にあるので、よし動機善なりとも、結果の惡なるも者、動機の完全なるものとは認めぬのである。此點で吾人はミュアーヘッドと同じ考へであるから完全なる動機には完全なる結果を豫想し得べしと考へるので、此第四の塲合に於て初めて善といふのであるから、單に直覺的に行へばよいといふのではない、必らず充分の考量を要するとするので、此智(考量)と情(直覺)とが完全に調和せられたる所に眞我を認めるので、直覺主義でもなければ、打算主義でもない。社會的制裁を顧みざる爲我主義でもなければ、社會的制裁にのみ重きを置く功名主義でもない。道義の淵底に其立脚地を置き以て自他の生存を圓滿にし、天地の化育を助け、宇宙の目的を助成せむとするのである。吾人は日本に於て物質的打算的なる西洋の文明と、精神的直覺的なる東洋の文明とが、我が日本に於て融合せられつゝあることを知る。日本の新武士道は此融合調和の上に立たねばならぬと信ずるのである。

誰かいふ日露戰爭に於ける我が國の勝利を以て精神的なる武士

道の勝利といふ。然りこれ武士道の勝利なり。然れども、日本にして若し西洋日新の武器を用ゐることがなかつたならば、どうして今回の勝利を得ることが出來やう。日本の勝利は東西文明の都合よき調和に基因し、智識と道德、感情と理性、物質と精神、渾然相融してこゝに新武士道の興起を見ることが出來るのではなからうか。新といふたが、別に新らしい議論ではない。只だこゝに付言して置くのは武士道といふたからとて、軍人にのみ行はるべき道といふのではない。全國皆な兵であるから全國民の行ふべき國民道德の異名に過ぎないのであるといふ一事である。日本國民は實に此新武士道によりて初めて將來世界に雄飛することが出來ると考へるのである。（明治三十八年八月）

瞎眼晴

高利貸

◎世に最も憎惡せらるゝものは高利貸にして、人に最も重寶がらるゝものも亦高利貸なり。重寶がらるゝが故に、其害や多く其毒や深し、憎惡せらるゝが故に其情や冷にして其手段や酷なり。

◎彼等は曰く自由競爭は經濟の原則なり、社會の事之れを自由競爭に一任して初めて發達し進歩すべし。何ぞ獨り利息にのみ法定の制限を付して其自由競爭を妨害することあらんや。天下の事は皆な需要供給の理に律せらる、高利借ありて高利貸あり、

彼の需要あつて此の供給あり、何ぞ殊更に高利貸を憎惡するの所由あらんや、高利貸は實に社會の需要に應じたる一現象のみ何ぞ必ずしも不德の行爲と云はんやと。

◎然り高利貸は社會の需要に應じたる一現象たるに過ぎざるべし、しかも社會の需要に應じたるが故に不德の行爲にあらずとせば密賣淫も亦た社會の需要に應じたる一現象として之れを看過せざるべからず、天下豈に此の如きの理あらんや。

◎まことに自由競爭は社會發達の主因なり、然れども社會の事を單に自利的競爭にのみ一任するは國家の福利にあらず況んや高利貸の需要者は多く金錢の必要に迫られ目下の急を救ふ事に汲々として撰擇の自由を欠くものなるをや、高利の貸主と借主との關係は一般の社會事業の如く之れを自由競爭を以て目すべき者にあらず。國家は實に利息制限の法を定めて此自由を束縛したり、然かも高利貸は巧みに法網をくゞりて自己の職業を營み、甘言借主を說て債務を重からしめむとす、これ豈に世の憎惡を招くの値なしとせんや。

◎高利貸の金を人に貸さんとするや、借主の一名なるにも拘はらず通常他に連帶者二名を出さしむ、此二名の者は實際の借主にあらざるを知て然かも名を證書に連ねて法律上の債務者たらしめ且つ百圓を借らんとするものには手數と稱して五分若くは一割を減じて九十圓若くは九十五圓を渡すか或は數月分の利子を前徵して八十圓內外を渡し、甚しきは利子と手數とを削除して七十圓內外を渡して、百圓の證書を作らしめ、又は百圓以上の證書を作らしめて百圓を貸與す、これ實際の入手と其額を異

にしたる金員を貸與して實際の債務以外に責を負はしむるもの、契約既に虚僞の性質を免れず、貸す者の非なるや論なし、借る者も亦是とする能はず。

◎試に本年一月に金百圓を借入るゝとせよ、目今最も多く行はるゝ高利の相場は一割の手數に五分の利子なりとす、而して三ヶ月分の利子と手數とを削除するが故に實際入手するものは七十五圓なり、越て三月に至れば期限なるが故に書換幷に三ヶ月の利子を拂はざるべからず、三月より四月を經て五月に至り、五月より六月を經て七月に至り、七月より八月を經て九月に至り、かくして翌年の一月に至れば利子幷に手數として支拂へるもの百二十五圓に達し、而して證書の金額百圓は依然たるなり、彼れ高利貸は尙ほ此の手段を進行して取り得るだけは之れを取り、取り能はざるに至れば之を法廷に訴へ法定の利子と證書の金額とは之れを得ずんば止まざらんとす、貪婪飽くなきも亦甚しい哉。

◎然かも彼等の商業に巧みなる多數の日月を經過して多數の利子を拂込みたる債務者に對しては、さすがに苛酷なる請求を爲す能はざれば此債權を他の高利貸に讓渡して其者をして之れを請求せしむ、債務者既に多額の利子を拂込みたるの事情を開陳して猶豫を請へば彼はいふ「ソレは僕の關する所でないです」と此に於て人情てふものは全く沒却せられ畢るなり、此等は尙ほ可なり、甚しきは債務者の急を察して「此金は少し高いのですが」などと云ひて、一千圓の金に一千五百圓の證書を作らしめたるものあり、某華族の如きは此手段に陷りて禮遇停止の悲況に沈みた

りき、彼の債務者の目に一丁字なきに乘じて證書を僞造する如きも彼等の敢て躊躇せざる所、然れどもソハ已に法律上の罪人なり今云ふべき限に在らず。

◎狀態此の如し某經濟學者は之を論じて其害强盜よりも甚しと云ひぬ其說の要に曰く暴力を以て公然他人の財產を奪ふ强盜の害は一個人に止り且つ一時的にして永久にあらず高利の害は家族幷に遺族に及び、奪はずんば飽くなし、而して之を彼の最も惡むべき詐欺と比較するに兩者ともに他人の財產を自己の有に歸せんとし交際を要し日月を要する點相似て唯だ詐僞は奸計を以て秘密に之れを行ひ高利は財力を以て公然之れを行ふの差あるのみと論稍奇激に流るゝと雖、亦實に此の如きものなくんばあらず、高利貸は到底不德の行爲たるを免れざるなり。

◎かく論じたりとて、吾人は昔時羅馬に於て行はれたる如き無利息貸借を正當として利息を排斥するものにあらず、土地に於ける地代、勞力に於ける賃銀等と共に資本に於ける利息は經濟上よりいふも道德上よりいふも正當なるものにして、もとより之れを排斥すべきものにあらずと雖、唯だ其目的財力を以て他人の財產を奪はんとするに出づるの利息は道德上これを詐僞强盜等と同視するの價値あるものとす。

◎之れを高利貸に聞く、高利貸は一個の冒險事業なり、十人取引するの中大抵一二軒は倒れとなる、此に於てこれを全體に分配して自己の損失を償はざるべからず、冒險事業の利多きは當然の數なりと、此說もとより因果を顚倒せりと雖、高利貸の一種の冒險事業に類するは事實なり、貸す者己に冒險の精神を以

てす、借りたる者も亦た冒險投機の業にあらずんば優に高利を拂ふの餘裕あるなし、其實業を蠹毒する又少なしとせんや。

◎ベームバエルク氏、曾て高利を借用するものを評して曰く彼等は將來を輕視し現在を重視するの弱點を有すと、人苟くも永遠の計を爲す、誰れか高利を借るものあらんや、而して之れを敢てするもの多きは何ぞや、世益進みて貧富いよ〳〵懸隔し貧者の困厄は此危險なる高利を以てするにあらずんば醫する能はず、之れを醫せんとして却て不治の困厄に陷るにあらずや、現在に明にして將來に暗きは日本國民の弱點なり、此弱點に乘じて彼れ高利貸は自己の職業を營む、憎むべき哉、彼輩。

（明治三十一年八月）

藝妓論

◎東京市の英艦隊歡迎會に、藝妓を列せしめたことは、確かに狹量な道學先生の議論のある所だと思ふて居つたのに、別に非難の聲も起らぬのは、先生達も大分開けられたと見える。

◎ヤレ褄を取つて歩くな。指輪は一つ以上はならぬと世話を燒かれた警視廳も大目に見てござる。世の中といふものは、勝手なものだ。

◎さればとて、僕は藝妓排斥を唱へるやうな沒分曉漢でもない。僕は寧ろ今日の狀態に於ては其存在の止むなきを認めるのだ。

◎世の中といふものは、道學先生のいふやうに嚴肅なばかりが、能でもない。一面には確かに娯樂の方面が必要である。此娯樂

の要求に應ずるには、いろ〳〵なものがあるが、音樂や舞踏は、少くとも其主なるものゝ中に算せらるゝ、其音樂や舞踏を職とする藝妓が、何故に醜業婦と云はれるのであらう。僕は彼等を目して醜業婦といふものは、藝術の神聖を侮辱したものであると思ふ。

◎併しこれは皮相の論だ。實際今日の所謂藝妓なる者は、藝術を賣るものではない、媚を賣るものだ、秋波を鬻ぐものだ。否な〳〵終に娼妓と相距るなきものだ。これを醜業婦といはずして將た何とか云はむ。

◎僕は今日の藝妓を目して醜業婦なりといふに同意する。併しながら今日の藝妓が惡いからといふて、藝妓其者を社會から排斥しやうとするのは少しく早計ではないか。

◎藝妓をして今日の如くに墮落せしめたのは、政治的に首都を征伏した獸性的官人の罪で、藝妓其者の罪ではない、藝を賣つても情を賣らぬといふたのが、江戸藝妓の誇りであつた、これに強ふるに權力と金力とを以てし、虛榮の心に強くして、意志に弱き婦女を誘惑して、終に醜業を敢てするに至らしめたのは官人の罪だ。

◎加ふるに軟弱にして些の俠骨なき上方婦女の輸入は江戸生ッ粹の氣質を一變し、三百年來賣女と峻別して技藝の獨立を保たしめたる江戸藝妓の面影を沒却するに至らしめたのだ。

◎幕府の政策は確かに今の警視廳よりは巧妙であつた。遊廓以外に藝妓の存立を禁じて、唯だ「親兄弟の爲めに據なく娘妹の內、藝一通りにて茶屋向へ出候儀は格別、最も賣女同樣の稼致させ

申間敷」(天保九年十二月町觸)と定めて淫賣婦と混同するなからしめた。

◎勿論人間は神ではないから、幕府時代といへども、隨分醜業に傾いたものがないではないが、それらは藝妓仲間に指彈することになつて居つたから、比較的に墮落は見なかつた。

◎今日は此制裁がない上に、藝妓其者を醜業婦的の取扱をするやうになつたから、イヤハヤ士君子が口にするも恥るものとなつてしまつた。併しこれは弊である。其弊を矯めることが出來れば、決して排斥すべきものではない、其の弊を矯めることが出來ないとすれば、全然これを禁ずるの外はない。

◎今日の社會は藝妓を禁止するの權利はない。よし之れを禁止した所が又同じやうなものが出來るのは自然の數だ。如かず其弊を矯むるの策を講せんにはだ。

◎それは、どうすればよいか、それにはいろ〳〵細い方法もあらうが、先づ第一に一たび醜業婦と混同するの行爲のあつたものは營業を停止するのだ。勿論曾て醜業婦たりしもの又は醜業類似の行動あつたものゝ營業を許さないのだ。

◎一面に斯くして醜業的行動を藝妓以外に放逐し、一面には公會の席上にあらずむば、藝妓を列せしむることを禁ずるのだ、即ち待合樓上の淺酌低唱なぞは出來なくする。かうして藝は賣れども情は賣らぬ、情を賣るものは藝妓としての待遇をせぬといふ風にしたならば幾分か其弊を矯めることが出來やうと思ふ。

◎世の中には。さほどでもないものを善くない〳〵といふて、實際に善くならざらしむるものがないとは云へぬ。藝妓のやう

なものは或はそれではなからうか。

◎社會がこれに相當の待遇を與へず、自己も亦其本職を自覺しないものであるから、終に今日のやうな忌はしき風を生じたので、彼等をして自己の本職を自覺せしめ、社會も亦其本職を認めるやうになつたならば、自然に改良することが出來はしないかと考へる。

◎河原乞食といはれた俳優の地位が上り、多少明治の教育を受けたものが出來てから、中流以上の俳優に男地獄的弊風が少なくなつたのは事實だ。藝妓とてもマンザラ此自覺の期がないとは云はれまい。

◎一國の首都たる東京市は世界の第一等國たる英國艦隊の歡迎に藝妓を用ひたといふことに就て、考へた節々を謂ふたのである。

（明治三十八年十月）

○

◎娼妓の如く、どの點から考へても、人道に背反するものゝ社會より絶滅せねばならぬことは云ふまでもないが、全くこれと撰を異にするものを、強て之れと同じやうなものに墮落せしめやうとするのは社會の罪ではあるまいか、否な僕をして云はしめば、娼妓の存在をも社會の罪とするのである。其事に就ては拙著女性觀に論じたことがあるから左に引用することゝしやう。

憐れなる哉、彼等の多くは自ら活くるの藝能なきが爲めに、人生最も恥づべきの業を求むるには至りしなり、これ實に社會の罪にして、女性の恥辱なり、ことに我が國に於ては社會の道念微弱にして、醜業婦を指彈するの風薄く、「女は氏なく

して玉の輿に乘る」といふ如き古諺に魅せられ、徒らに脂粉を施し、盛裝を凝らして媚を賣るの美に眩せられ、無分別なる女性の時に自ら之れを營まむことを望むもの少からず、一面に於ては父母の爲めに身を浮川竹に沈むるを以て德義の如くに思惟したりし舊道德の弊は、多少分別ある女性をして之れに陷るを以て罪惡視せしめず、國家も亦醜業を公許して。彼等をして公然此の云ふに忍びざるの業に從はしむ、これ實に悲むべきの現象にあらずや。女性の地位はこれあるが爲めに下落し、他方に如何に高尙のことを企畫するとも、一方に此醜汚の業を營むものあるに於ては、女性の品等は終に高むるに由なきなり。何の世、如何なる時といへども、社會の裏面には闇黑のあるなきにあらざるべきも、公々然此闇黑を暴露し、我が同胞に此憐れむべき女性あり、忌むべき風習あることを示すは國民の恥辱にあらずや。濱の眞砂の盡きざるが如く盜賊の盡くることなしとて、之れを公許するの非なるを思はゝ終に絶滅する能はざるべしとて、此醜業を公許するは失當の甚しきものにあらずや。吾人は殊に我が國女性の體面上より公娼廢止を絶叫せむとす。

◎藝妓と娼妓とは姉妹で、歷史的に研究すれば、同一物の世の進歩につれて分業したものに過ぎないので、各國共に人文が進むで生活の困難を增して來た時代から、かういふ現象を生じたので、我が國では平安朝の中半から遊女、傀儡師なぞいふものがあつて、物語類にも散見して居るし、西行の撰集抄にも江口橋本なんといふ遊女が住居見めぐれば、家は南北の岸にさしは

さみて、心は旅人のしばしの情を思ふさま、さもはかなきわざにて、」なぞとある、少し後れて白拍子といふものが出て、これは藝を專らとしたやうであるが、しばらくで其跡絶え(京都の三本木の藝妓が其系統だと話した人があるが、これも今はないといふことだ)戰國時代となつては遊女のみ行はれて、一種異樣の歌比丘尼なる賣女あるに至つたが、德川氏が遊廓を一所に定めて、これら醜業婦の市民と混ずることを避け、元和三年に法令を下して

傾城町の外、傾城屋商賣等不可致幷に傾城町圍の外、何方より雇來共先々へ傾城遣候事、向後一切可爲停止事

と云ふことになり、其後諸種の變遷があつたが、兎に角傾城町以外に娼妓の存在を許さなかつたものであるから、寶曆の頃から踊り子とか町藝妓といふものが出來て、藝を賣ても情は賣らぬといふことを主義とするものが生じたので、其裏面は怪しいものであらうが、こゝに藝娼妓の分業が成立したのだ。

◎社會の進歩は、道德に背反するものゝ公然たる存在を許さぬやうになるから、娼妓の絶滅せらるべきは、決して遠き將來でなからうと思ふ。藝妓としても、女子教育の進歩はこれらの職業を減じ、女性が漸次交際社會に出るやうになると共にこれらの存在を要せざるに至り、俳優と同一のものと變態して面影を遺す位に止るであらう。

演劇と道德

◎演劇は時代の反映で、其演ずる所の題目に於て當代の思潮の幾分を見得べき筈である。現時多數の喝采を博して居る諸種の演劇は、多くはこれ舊社會の遺物で、頑迷固陋なる道德を皷吹して居るものに過ぎない。

◎試に忠義の手本として行はるゝ忠臣藏を見よ、夫の爲めに身を賣るを以て女の節義なりとするお輕なるものあり、妹を殺すを以て忠義なりと信じたる平右衞門なるものあり。暴を以て暴に易ふる復讐を以て武士の精華なりとして激賞して居るではないか。

◎「忠臣講釋」の間重次郎の妻は賣淫婦となつて孝道を奬み、「千兩

幟」の稻川の女房は身を賣つて夫の男を立てんとし、共に貞女の龜鑑の如くに喝采せられ、歡迎せらるゝではないか、共にこれ不倫の行動、しかも公々然演ぜられこれを怪まぬのである。

◎「蝶花形」の小阪部兵部は義の爲めに孫を殺し、「伊賀越」の荒木又右衞門は恩の爲めに子を殺し、「御所櫻」の辨慶は主人の爲めに我が生みの子を刺し、「玉藻前」の鷲塚金藤次は同じ心を以て我が娘を斬る、これらの反道德反人情の行動は、忠義の摸範と思惟せらるゝではないか。

◎殊に「菅原傳授手習鑑」の松王は主人の身代りに我が子を殺して自己の忠節を全ふせりと喜び「持つべきものは子なるぞよ」とほざく、何等の無情漢ぞ、自己の名の爲めに一子を犧牲にす、しかも看客は之れに感じこれに服す、反道德もこゝに至つて極れり

といふべきだ。

◎更らに松王の人格を見んか、身、藤原時平の臣下でありながら、心を菅家に寄せて菅秀才を助け病と稱して主家を辭す、これ實に二股武士たるの誹を免れない行ひである。

◎二股武士といへば、演劇に現れたる熊谷直實も、矢張これだ、我が子を殺して敦盛を助け、主を欺き友を賣る、源平の布引瀧の實盛も、身、籍を平氏に有しながら源氏を助くる、何等の破廉恥ぞ、しかも武士の手本と見做されてをるのは、何たる奇怪ぞ。演劇の道德は多くは此類である。

◎權利を抂げ法を無視し、閑々と法廷に三曲を奏せしめたる秩父庄司重忠は、明判官と稱せられ、法の一點をも抂げじとした る岩永左衞門は阿古屋をして「殿様顏して並んでござつても其行き方は雪と墨」と云はるゝに至つた。沒道德の甚しきものではないか。

◎武士の情に重きを置て正義の觀念を欠くの一事は、多くの時代物に於て演ぜらるゝ道德思想である、實盛も、熊谷もこの爲めに褒めらるゝことは、道理のやうな不道理のことではないか。

◎其僻、僞忠孝の爲めには、人情を矯め、「手習鑑の武部源藏がとつおいつ思案に暮れて「すまじきものは宮仕」といへるを忠君主義に反すとして、「お宮仕はこごやわい」と改めしめて、作者が苦心を水泡に歸せしめ、「忠臣藏」のお輕が夫と父との死を聞いて、「とゝさんは御年の上勘平さんは、三十になるやならずに」と云へるを孝道に欠けるとして「とゝさんは尙のこと」と改めたる如きは、人情を沒却したる致方ではないか。

◎かゝる小刀細工をまでして偏狹なる忠孝主義を宣傳しやうとするのは、丁度ミュアーヘッドの學說に驚愕して學校の認可を取消した文部省と同じやり方である、盜賊、收賄、姦通等の劇は公々然演せられながら、僅か一二句の忠孝に反するものあれば、驚いてこれを改めるとは、さても〳〵よく文部省のやり方に似てをるではないか。

◎演劇をして社會の反映といふことを許せば、今日の演劇に行はるゝ道德は、文部省の偏狹なる忠孝主義の反映であると見ることが出來る、これ果して新時代に應用し得べきものであらうか、嗚呼これ果して新時代に應用し得べきものであらうか。

（明治三十六年十二月）

宿屋哲學

◎五十三驛、肥馬輕裝、したへ〳〵の御行列、本陣脇本陣の御泊りに、町人百姓を驚かせし外は、六部、巡禮、武者修行、さて行脚僧どもの木賃泊りのみの昔と代り、紳士紳商が東西に御奔走なさる今日、宿屋哲學の攻究も、決して無駄なことではあるまい。

◎一體全體、日本の宿屋ほど滑稽なものはない。イラッシャイの聲に送られてズット通れば、向ふの都合のよい座敷へ通されて、向ふの都合のよいものを食はされて、向ふの都合のよい丈けの金を取られて、尙ほ其の上に、向ふの都合のよいやうに茶代をやらねばならぬのである。

◎客の方では、何んな間に通されるやら、何を食はされるやら何程の代を取られるやら、ナニそんなことはといふやうな顔をせねばならぬ、勿論一等何程二等何程などとの札はあるが、大抵は應對をせぬのであるから、何等に取扱はれるやら、一向わからぬのである。

◎若しそれを應對でもすれば、紳士の品格に關するやうに思はれ、宿屋の方から氣をきかして問へば、客の方では、都合のよいやうにしろと、遠慮したやうな威張つたことをいふ。ナント面白いことではないか。

◎それがこれまでのやうに、旅行がおつくうな時代ならば知らず、官設の鐵道でさへ(勿論のことだが)、賃錢をきめて、剩錢を出させて乘る世の中に、宿屋ばかりの御都合主義は、哲理上斷じて不可である。

◎然らば則ち如何にすれば可なるかだ、別にむづかしいことはない、現に箱根や熱海のやうな温泉宿でやつてをる通りに「お伺ひ主義」なるものを實行するのだ。

◎「お座敷はどちらにいたしませう、お二階にいたしませうか、それとも下の方に、八疊は一日何程、六疊は何程頂戴いたします」とお伺ひ申す。客の方でも、どちらでもよいなどいふ痩我慢主義を實行しない、そこで嫌な思ひをするにも及ばず、柄にない金を出すにも及ばぬのだ。

◎今日はお肴は鯛に鰈位でござりまする、鹽燒にいたしまするか、照燒にいたしますか、フライにでもいたしまするか、それとも潮煮か鯛南蠻か、若し野菜がよろしうござりますれば、左

樣仕りまするとお伺ひだ。そこで客も嫌ひなものを食はされる憂がない。

◎此お伺ひ主義が、至極便利だと思ふ、勿論茶代などは、全廢の主義を取るべしだ、今日チョット氣のきいた泊り方をすると、茶代もやらねばならず、女中にも祝儀を奮發せねばならず、番頭にも心付をやり、料理番にも何がし、湯番にも何程と、相應のことをせねばならぬ。それでなくては、到底紳士らしい待遇もしないのだ。

◎宿泊料一圓、茶代二圓、これ已に滑稽だ。それに女中番頭料理番、各二十錢、湯番は十錢としても七十錢、一夜三圓七十錢、これが決して上等の泊り方でないのだ。紡績工女半月以上の賃錢を無意義に消散する、これ頗る不經濟なことではないか。

◎女中の祝儀に就いては、頗る研究を要することがある、女中は宿屋の雇人で、客の用事を辨ずるのは當然で、別段これに對して報酬を出すべき必要はない筈であるが、忙しい中を、酒の相手などをさして、くだらぬ話なぞを聞かさるゝ女中の身になると、少し位祝儀でも貰はねば、引合はぬのである。

◎それに宿屋の方でも、客の祝儀をあてにして、給金を減じてあるから、今日の塲合滿更ら棄てゝもおかれぬ。併しこれは宿屋の不都合で、客の關する所でない、僕等は祝儀全廢論を唱へるに躊躇しない。一體祝儀などゝいふことは、封建的遺習で平等一如の人間であるが、人に使はるゝものは、劣等なるものゝ如く心得、「おれはえらい、おれにあやかるやうに」といふやうな意味で出すので、人權を蔑如したものである。宿屋の女中も泊

る客も、各其務めを異にしてをる丈けで、決して威張るべき權利はないのである。

◎祝儀を出して威張ることは、東京附近が甚しいので、中國にゆくとこれが少い。……金高も少ければ、やる人も少い、……甚しきは祝儀を與ふるを以て、これを玩弄せんとする如く心得る所がある。

◎宿屋に賣淫婦の如きものゝ混在するのは、宿屋の神聖を害するもので、これを一掃しなければ、其改良は行はれぬ。或る地方では、宿屋の女中をして、酒の相手をせしむるを禁じてをる。單に飯の給仕をするのみで、酒となれば德利を置て引さがる。これは風儀上結構なことであるが、襟掛なれば差支ない、などといふ除外例は滑稽といふの外はない。

◎これらの地方といへども、藝妓を宿屋に呼ぶことを許してをるから、「お酌ならば藝妓をお呼び下さい」といふやうな殆んど藝妓勸誘的の態度を取る宿屋がある、實に不都合極る至りだ。殊に隣客の迷惑をもかまはず、ドンチャン騒がれてはたまつたものでない。東京市の如く、日本國中、藝妓の宿屋に出入することを嚴禁して貰ひたい。

◎宿屋は自分の家の代理をするもので、(これが宿屋哲學の根本原理だ)料理屋の代理ではない、遊冶郎の會合所ではない。それであるから出入なぞは嚴禁して貰はねばならぬ。

◎客も客だ、「旅の恥はかき捨て」などといふ主義を持して、亂暴狼藉の行ひのあるのは、宿屋の神聖を害すること甚しい。宿屋にある猶ほ家庭にあるが如く、宿屋を神聖ならしむる、猶ほ

家庭を神聖ならしむる如く心得てこそ、紳士の態度といふことが出來るのである。亂暴狼藉の行ひのあるのは、下等の客に少い、却て所謂紳士(殊に官吏會社員なぞ)に多いのである。

◎古歌に

いづくをも定めなき世と知りぬれば家をも旅のこゝちこそすれ

といふのがある。宿屋を開業してより百五十年、自分の代になつて早や六十年といふ、京都の某旅館の主婦僕に語つて、宿屋の心得は、

いづくをも定めなき世と知りぬれば旅をも家の心地こそすれ

と思はしむるのが宿屋の秘訣である。アマリ叮嚀過ぎても五月蠅く、アマリ粗雜でも氣に入らぬ、こゝの所がむづかしいのだと言ふた。僕は實に宿屋哲學上、千古不磨の格言であると思ふ。

◎幾日をか經ぬる旅の空、自分の知り合ひの宿屋に行くのは、家に歸つたやうな氣のするものである。僕は如何に不便であつても知り合ひの宿屋に泊ることにする、よし停車場を距ること數十丁あつても。

◎停車場前の宿屋は夕に迎へ朝に送る、通り客が多いから、何となく不親切である。旅をするものは停車場前の宿屋に泊るなといふのは、或る旅行經驗家の云はれた語である。勿論除外例はある。

◎宿屋哲學として、論ずべきことは之れに止まらぬが、今は其改善を要すべき二三を擧げただけで筆を擱く。(明治三十六年八月)

小問題

◎道德を談ずる演說會に、空名を列する辯士あり、時間を守らざる會主あり。忠君愛國を敎ゆる倫理敎員にして所得稅を免れんとするものあり、これ大問題かこれ小問題か。

◎中流以上に觀覽せしむべき劇場の風儀は、識者の話頭に上り、下層社會の感化に多大の影響を及ぼす小劇場に就ては顧るもの少し。

◎盛裝せる令嬢に席を讓ることを知る紳士も、坂に車を推す赭顏亂髮の婦人を助くることを知らず。

◎輕微なる道德、これ人の等閑に付し易き問題にして、實に道義革新の根底なり。

◎我が友高嶋米峰、曾て釣錢道德を絶叫し五錢の買物に五圓紙幣を出して他の迷惑を顧みざる暴漢多きを憤慨す。これ至言なり、これ大なる道德問題なり。

◎往復端書に返書を與へざるは、これ窃盗なり、返信用切手を亂用するは、これ冒認なり、而して人、これを咎めず。

◎大功は細謹を顧みず、これ世を誤るの言なり、大功時に細謹を顧みる能はざることなきにあらず。然れども細謹なきの大功の更らに貴ぶべきを忘るべからず。

◎大問題は何人もこれに注意す、以て人を見るに足らず、小問題に於て却て其人格を想見すべきもの少からず。古來英傑の人を見る、多く此監識法を用ゆ。

◎小問題終に小にあらず、大問題また必らずしも大ならず。識

者須らく所謂大問題に傾倒して這般の小問題を閑却することなきを要す。

冥想雑感

朝思

終

明治三拾九年三月十九日印刷
明治三拾九年三月廿二日發兌

朝思暮想
分本各冊　金參拾錢
合本上製　金七拾五錢

著者　加藤熊一郎
發行者　伊東芳次郎　東京市本郷區本郷一丁目九番地
印刷者　山田英二　東京市小石川區久堅町百八番地

不許複製

發行所　東京市本郷區本郷一丁目九番地　電話下谷一九三八番　東亞堂書房

大賣捌
東京市……小林嵩山房——東京堂——前川書店
大阪市……吉岡寶文館——松村文海堂——其他各書林
京都市……若林書店——寶文館支店——外著名書林

東亞堂書房營業要旨

東亞堂は自店出版の書籍の外、各出版元と特約の上、博く内外の書籍を取揃へ、非常の薄利を以て販賣致し候間、何種書類、如何なる書店發刊の圖書を不問、陸續御註文奉願上候

東亞堂は品切れ、又は自店に持合せなき品と雖も、御註文の節は諸方搜索、能ふ限り御便宜を圖り可申候間、何品に不拘御註文奉願上候

東亞堂は書籍に關する讀書家各位の御問合せに對しては極めて懇切に又迅速に御回答申上候間、必ず返信用郵券を添へ御照會被下度候

東亞堂は御註文品は多少に不拘、其都度敏速に發送仕候間、代價郵税共、必ず前金を添へ（郵便爲替なれば本郷一丁目郵便取扱所渡に、郵券代用なれば一割增にて）御送附被下度候但し往々收入印紙御遣しの諸賢も有之候へ共此儀は堅く御斷り申上候

東亞堂は益々出版部の業務を擴張致し良書續々發行仕候間不相變御愛讀之程偏に奉懇願候

東亞堂書房營業要旨

黑岩周六先生序　加藤咄堂先生著

高評八版

冥想論

▲新式美術的奇裝▼

菊判全一冊
定價三十五錢
郵税六錢

興國の氣運大に熟し、國民品性の修養今日より急なるはなし、本書は、著者が該博の識と流麗の筆とを以て、品性修養の根底たる冥想を、各種の方面より論究し、獨坐靜思の快感を說きて其理論と方法とを詳叙し、進んで禪の宇宙觀人生觀を述べて、瞻力養成の法に及ぶ、加ふるに冥想雜感の一篇は、實に君が半生の思想史とも稱すべきものにして、奇想縱橫、趣味滿幅、世の修養に志あるの士本書を讀まば、曉悟する所必ずや大ならむ。

幸田露伴先生序　加藤咄堂先生著

新刊

冥想雜感　朝思暮想

全二冊

定價各册三十錢
郵税各册四錢
合本上製七十五錢
同郵税八錢

加藤咄堂先生は論客たると倶に又文章家也其論辯の範圍の博きが如く其筆力の自在勁健にして奇想縱橫の趣を極めたるは多く匹儔を見ざる所也本書は先生が坐臥行住靜思冥想の餘に得られし雜感數百則の中粹を拔き精を萃めて珊然珠を連ねたるが如き物にして其趣味の多樣なる其文詞の流麗なる之を近代文章の模範と稱すとも亦溢美の言にあらざる也苟も文章家としての君を知らむと欲するの士は座右一本を備へざるべからず。

發行所　東京市本郷區一丁目　東亞堂

法科大學教授 法學博士 梅謙次郎君序
法政大學總理 亞浪 臼田卯一郎君著
早稲田大學監 法學博士 高田早苗君序

新刊

最近學校評論

洋裝全一冊 貳百四十頁 定價 四拾錢 郵税六

學校は人材の搖籃也、志望の成否繫りて學校の善惡に存す。本書は則ち東京に於ける各種男女學校の眞相を、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、縱横の論評を試み、以て學界を警醒し、學生を利導せるもの。時に親を滅して斬馬劍を揮ひ、時に諄々として成功の福音を傳ふ。眞に近來の快著にして又學藝修業者の新光明也、敢て滿天下の學生諸君並に父兄諸君に一本を薦む。

發行所 東京市本郷區目丁一 東亞堂書房

幸田露伴先生著

新刊

潮待ち草

菊判全一冊 體裁優雅 定價八拾五錢 郵税十錢

潮待ち草は露伴先生の、隨筆也、自然觀也、人世觀也、はた社會百般の事物に對する觀察錄也。詩を談じ、文を品し、史を論じ、處世を說きて、眞に他の企及すべからざる妙趣あり。以て品性修養の資とすべく、以て後進文を學ぶの範とすべし。附錄『土偶木偶』の一篇は、亦先生が近作小說中の白眉にして、相俟つて讀者家諸君が案頭の光彩たらむ。

近刊

頼朝

（印刷中）

英雄由來風流事に富む、而かも我『頼朝』の情話の如く、波瀾、曲折の妙を極めたるは、蓋罕なり、露伴先生夙に頭大公が情の半面に心を潛めらるゝこと久しく、博參考證、遂に斯の一篇を成す。燃ゆるが如き青春の戀に惱める英雄の俤は、當代の文豪が靈犀の詩筆に依つて讀者の眼前に躍如たらむ、當に之れ近時文壇の一大偉觀！

發行所 東京市本郷區目丁一 東亞堂書房

野口米次郎先生新著

阪井紅兒畫伯畫

大歡迎
忽再版

邦文 日本少女の米國日記

菊大判全一册
洋風美術的製本
定價七十五錢
郵税八錢

ハイカラー式部『朝顔嬢』の無邪氣にして大膽なる觀察記。英文「日本少女の米國日記」を和譯せし物。英學生諸君が原文解讀の好參考書たるべきは、著者が自ら『元來自分の著者故、意味の間違つて居る點は斷じて無』しといへるにても知り給へ、警句妙語篇に滿ち、一讀卷を釋く能はざる興味あるは、當年歐米の文壇を風靡せし珍書として、已に世界に高評ある所也。

秋元蘆風先生譯

▲袖珍新形美装▼

最新刊 シルレル詩集

全一册百九十頁
挿畫七葉
定價四拾錢
郵税四錢

獨の詩聖シルレルが名篇を、獨詩の和譯を以て盛名ある蘆風先生の慘憺たる經營を費して邦詩型に譯されたるもの。彬々たる先生が麗藻は、幽婉なる詩聖の妙想と相俟つて、一誦恍惚たらしむるの興趣あり

發行所 東亞堂書房 東京市本郷區一丁目

東京帝國大學講師
東京高等商業學校教授
早稲田大學講師 張廷彥先生校閲

清國北京張毓靈先生
日本東京宮澤文次郎先生合著

官話速成篇

洋装全一册
正價三十五錢
郵税四錢

本書は張毓靈、宮澤文次郎兩先生が多年教授上の實驗に基づき支那語官話の教科書として編纂せられたるものにして一々張毓靈先生の嚴父張廷彥先生の周密なる校閲を經られたる最新完全の良書也。

清國北京 張毓靈先生
日本東京 宮澤文次郎先生合編

東語速成篇

官話速成篇總譯

洋装全一册
正價十五錢
郵税四錢

官話速成篇の總譯にして一は以て清國人にして本邦語を學ぶ者の參考書たらしめんことを期したる物學者兩書を對修せば得る所更に饒からむ。

官話速成篇 附總譯

洋装全一册
正價五十錢
郵税六錢

官話速成篇と東語速成篇との合本なり。

發行所 東亞堂書房 東京市本郷區一丁目

德富蘆花先生序　角田劍南先生著

高評
再版

時文評論 **理趣情景**

全一冊體裁瀟洒
定價四拾錢
郵税六錢

健實の想、莊麗の文、現今文壇評論家の泰斗として、よく理を盡し情を察する者は實に我劍南道士に非や。本書は君が讀賣新聞の日曜文學紙上に於ける、社會、文藝、思潮、人物等に關する獨特の評論に、自然、人生、美術哲理等に對する隨時の感想文時文等を加へ、風雲の氣、兒女の態兩つながら併せ得たるものにして、近時讀者社會の耳目を一新すべき快著也。

茅原華山先生著

渡邊國武先生題詞
黑岩周六先生賛論
佐々木信綱先生題詠
三宅克己先生畫
齋藤松洲先生畫

好評嘖々第八版發賣

動中靜觀

全一冊定價四拾錢郵税六錢

華山先生の文は世既に定評あり西園寺陶庵侯は『恰も蘇老泉の文を讀むが如し』と稱せられ渡邊無邊老侯は『山淺間、物産生絲、湖水諏訪、文章華山、武官福島』と謳はれ而して黑岩涙香先生は實に『其趣味の博きこと時人及ぶ者少し』と賛論せられたり本書は先生が半生の思想史にして又觀察史也篇を分つこと八其趣味の多樣なる　其文詞の流麗なる　近時出版界の一異彩たり敢而大方の瀏覽を俟つ。

發行所　東亞堂書房　東京市一本郷區目丁

在米國　茅原華山先生著

高評
再版

世界 **文明推移史論**

菊大判全一冊
定價五十錢
郵税八錢

本書は筆を東北と九州に起し日本海岸と太平洋岸諸國の論評より亞細亞文明の東漸を論じては儒教と佛教の批評となり歐洲文明の西漸を論じては希臘羅馬の文明及基督教の批判となり歐洲の衰運米國の勃興日本文明の西漸を說きて朝鮮支那露國等の國俗民情に及び博く地理學、史學、人類學等に亘り歐亞兩文明が各東西に推移せし史上の事迹を詳論して日本の眞價及日本の世界に於ける關繫的位置を發見し以て我大和民族の天職の存する所を指點す眞に刻下同胞必讀の快著也。

大日本催眠學會々長小野福平先生著　（大日本催眠學會藏版）

催眠術治療精義

菊大判全一冊金文字入洋布美裝
正價九拾錢　郵税拾錢

本書は、大日本催眠學會長として、本邦催眠術研究家の先覺者たる小野福平先生が富贍なる學識と、多年の實驗とを基礎とし、博く東西の學說を參酌して斈た催眠術の原理に起し、心理學、生理學、醫學等の根底より催眠術を以て治療し得べき諸種の疾病の病理、症候、經過、療法等を說明せられたる催眠學界空前の大著にして催眠術研究者は、勿論、醫家、經世家等の荷も等閑に附すべからざる良書也。

發行所　東亞堂書房　東京市一本郷區目丁

宮內大臣 田中光顯氏題字
子爵 渡邊國武氏手簡
故 原抱一庵氏序

龜谷天尊先生著

再版 賜天覽 瑤琴

袖珍全一冊頗美製本
定價四十五錢
郵稅六錢

本書は天尊龜谷氏が、其該博超凡の識を以て、宇宙の萬象を達觀し、そが胸裡の琴線に觸れて流露せし筆の跡を、輯めて高雅なる一册子となし畏くも 聖上 皇后兩陛下乙夜の覽に供し奉りたるものにして、詩歌あり、紀行あり、漫錄あり、日本新聞は「苟も天尊を知らんとするものは必ず一讀すべき文字なり」と稱し、毎日新聞は「讀者をして感殆ど窮りなからしむ」と言ひ、二六新聞は「野趣饒き文字もありて頗る多方面なり」と評せり。

東京開成中學校
國語及漢文 講師 佐藤仁之助先生著

好評再版 新案百人一首通解

寸珍全一冊體裁典雅
定價十錢 郵稅二錢

小倉百人一首を、頭字に據りてあいうえお順に排列し、ごくわかり易く解釋した。百人一首を覺えるためにも、亦和歌を習ふ人の參考にも至つて便利な可愛い本！

發行所 東京市本郷區一丁目 東亞堂書房

東京開成中學校國語及漢文講師

佐藤仁之助先生著

受驗參考 國語漢文要語詳解

合本上製 定價壹圓
郵稅拾五錢

《分本》國語之部、定價四拾錢、郵稅八錢。漢文之部、定價五錢、郵稅六錢

本書は文學博士黑川眞頼先生の高足として、國語漢文言語學等の造詣深き佐藤仁之助先生が、從來東京開成中學校に在りて、本科目の教鞭を執らるゝ傍ら、多年の實驗に基づき、各高等學校試驗問題及び教員檢定試驗問題等を參酌して、中學程度より以上教員檢定受驗者諸君の參考に供せむため、特に數年の歲月を費し、博く各書を涉獵して、單語、成句、故事、熟語等の中、須要難解の語句を採り一一明快なる解釋を下されたるものなり、殊に國語之部の如きは、意義の解釋上必要なりと思はるゝものには其語原を註記し、尙其意義の變遷あるものは條を分ちて註釋し、更に一々書册に徵して其文例を揭げ、且梵語等の外來語より轉じたるものにはすべて羅馬字を挿入して原語の發音を明にせし等、其用意の周到なる、從來江湖に散在せる此種の書類中未だ曾て其比を看ざる處なり、又每語の排列は之をいろは順にして、幼時より「いろは歌」に慣らされたる學生諸子の索出に便し且別に五十音順索引をも附して、兩者孰れにても容易に搜索するを得らるゝが如き、如何に其便益の好著なるかを知るに足るべし。

新刊 漢字異同辨及用法

寸珍定價二十錢
全一冊郵稅二錢

同訓或は同音にして意義を異にする漢字の異同及用法を辨じたるもの別項の「國語異同辨」と相俟て文章家必携の寶典也。

發行所 東京市本郷區一丁目 東亞堂書房

佐藤仁之助先生校補　東亞堂編輯所編

増訂参版

國語異同辨

附　假字用法及誤り易き動詞語尾區別表

寸珍　定價十五錢
全一冊　郵税二錢

本書は國語の中に於ける同字同音の語句或は相似の文字にして其意義を異にするもの數千言を對照し一々懇切に其異同を辨じたるものにして斯學に於て堪能の聞え高き佐藤仁之助先生の嚴密なる校補を經且つ同先生の新案に成れる便利なる假字用法及動詞語尾區別表を附したれば國語研究者の參考として有益無比の良書也

文學士　武島羽衣先生序

慶應義塾普通部國文科教師　志賀華仙先生著

好評再版

作歌のしをり

全一冊　體裁優美
定價二十五錢
郵税四錢

武島先生の序に曰く『細やかにして煩しからず心得易くして卑しきに流れず斯道の隈々人の迷ふべき所々を說き明らめたるはげにおぼろげならぬいたづきとやいはまし』と又讀賣新聞は『叙述簡略初學者の好參考書也』と評せり

發行所　東京市本郷區一丁目本郷區　東亞堂書房

34

97
331

終